月刊

駒場唯一のコミュニティマガジン

恒河沙

NO. 8

巻頭言

キャンパスを歩いていて、いつも思うことがある。わたしたちがあらかじめ決まった道を急ぎ足で歩いている、ということだ。本来自由な場である筈のキャンパスが、実は各人の束縛された意識によって、不自由なものとなっていることを、私は感じざるを得ない。そこには発見や対話の生まれる余地は小さい。雑踏の如きキャンパスなどと言われるが、まさにその通りではないか。

駒場祭――そこでは、キャンパスの機能は一変する。あくまでそこは開かれた交流の場である。喧騒にすぎないと言われても、この賑わいをわたしは大切にしたい。

新たな発見、新たな対話――もしそれができるなら、日常においても、わたしたちは、新しいキャンパスをつくり出すことができるかもしれない。

目次

巻頭言 —— 1

ドツボに救いはあるか　竹内真介 編集部 —— 4

今、再び東大を問う 第四部 —— 14

「10年前」と文学部問題／山下　肇

こだわってゆくことこそ／小出　昭一郎

「処分」を考えるために／編集部

駒場祭恒河沙独善（ひとりよがり）企画案内 —— 8

Discover Komaba —— 26

人物クローズアップ〈寮のおばさん〉 —— 13

コラム 時代錯誤家 —— 37

何で今ごろ『いちご白書』なんだよ？　宮台真司 — 12
ぼくはインテリ？　豪 秋霖 — 23
増殖システム　アルミカン — 25
みんなにきいてほしいひとりごと　田中由利 — 29
ニヒリズムを考える　コンポラ＝フォト — 32
「モラトリアム人間の時代」における問題点　吉井啓二郎 — 38
予言について　廣澤和郎 — 40
新幹線車内販売体験記その2　夢野佐理葦 — 43

書評　48・49
読者からの熱い反響　50
奇怪クロスワードパズル　51（解答用紙 53・54）

ドツボに救いはあるか

―状況の打開めざして―

竹内　真介（編集部）

一概に言えることではないが、もしわれわれが、自分自身を含む社会状況のはらむさまざまな問題について何も知らず、目を向けようともしなければ、今の一見平和な状態が続くという前提のもとでは、かなり楽しく生活することができるだろう。むろん、人にはそれぞれ内面的な悩みや苦しみがあるわけだから、単に、上のような条件さえあれば万事うまくいくなどと言うつもりはない。外に対して目をつぶって、自分と自分の直接的な周囲にだけ目を向けてい↘

閉塞した時代状況の中で、われわれは展望を求めてもなかなか得られない。それどころか「シラケ」「やさしさ」的なドツボ状況の中でもがいている自分すらみいだす。どうしたらそこからはい出すことができるのだろうか。時代錯誤社では駒場祭において討論の場を設け、参加者と共に何らかのキッカケを得たいと考えている。この一文は討論のタタキ台のつもりで書いたものである。（25日12時159番です。乞御参加）

↘ればそれなりに楽しいだろうということだ。ともかく、こうしたことは、今のわれわれについてはかなり言えることなのではないだろうか。外への方向性がなく、内へと向かう傾向が根強くあるように思う。むろん、銀杏並木でドラ声をはり上げるとか、ビラを配るとかいうように外に対して表向きに意志表示をすることだけが「外への方向性がある」ことで、逆にそれをしないことが即「外への方向性がない」ということではない。外に目を向け、何かを感じとった結

果、内面において葛藤している場合もあれば、よく外にかかわるために今はとりあえず自分をみつめ直そうとしている場合もあるだろう。だが、ここで言ったのは、いわばそれ以前のことである。つまり外へのシヤッターをおろして内でぬるま湯にひたっているとでもいうべき傾向だ。

だが、そこには非常に漠然としたものながら、なんとなく不安だ、とか、どうもむなしいなあとかいう気持ちがつきまとっている。考えてみればそれは当然のことだ。自らがよって立つこれといったものもなくそうしたものが出てくるために必要な確たる価値観もないからだ。「たしかに、これというようなものはないけれど自分なりの価値観はあるつもりだ」という反論が出るかもしれないが、敢えていえば、内に閉じこもってだけいて出てきた価値観というものは非常にうすっぺらいものにすぎないことが多い。価値観というものは、他の価値観とぶつかったり、未知の世界にふれてみることで確たるものになる。また、情報メディアを通じての擬似体験のみによって醸成された価値観も非常にもろいものだ。情報量は多いが、それによってわれわれは世の中や人間をわかっているのではなく、わかった気になっているにすぎない。だから内面的に深めようという積極的な志向があったとしても外への方向性をぬきにしてはどうしようもないのだ。

しかも問題はこうしたわれわれの生き方のことだけにとどまるものではない。はじめに記したとおり、今は一見平和で、われわれに迫ってくるような問題はないかのようだ。だが、むろんそれは問題がないということを意味するものではない。自分が問題だと感じられないにすぎない。

かつてベトナム戦争がひどかった頃、「べ平連」なるものがあった。聞くところによればかなり広汎な〝ふつうの人〟たちが自分なりに問題を受けとめ行動していたものだったという。今、インドシナでは人々が食うや食わずで生死の闘をさまよっている。でも、われわれは新聞などで写真をみて、ひどいな、気の毒だなくらいは思っても、それを自分の問題として受けとめようとは考えない。どう考えてみても遠くの出来事でしかないのだ。しかもそれは単に物理的に遠い世界の出来事だからというだけではなさそうだ。例えば合成洗剤の有害性などは結構いわれていることだが、別にどうとも思わず使ってしまうし、われわれが身を置く駒場で代議員大会が成立しなくても別にどうということはない。対象が何であれそれがちっとも「問題」にならない。

「どうでもいい」のである。むしろそれらを「問題」としてうけとめたり、それについて行動することを異なこととすら感じてしまうようなところがあるのではないだろうか。だが、何と言おうと問題はさまざまなところにさまざまな形で存在しているのである。

マスコミはこういうわれわれを「シラケ世代」だの「やさしさの世代」だのとはやしたてるが、では「やさしさ」とは一体何なのだろう。語の全き意味における「やさしさ」でないことは明白である。例えば人間関係でいえば、人に対してカチンとぶつかりあうのではなく、そもそも人に対峙しないで2人で横に並んでそれぞれ自分を「大事大事」とあたためているだけ、という傾向があるような気がする。結局いわれている「やさしさ」とは、少しのことでフニャフニャとなってしまう外に対する異常なもろさ、ひよわさくらいのことではないだろうか。「シラケ」といったところで、かつての「反体制」「脱体制」としてのシラケとはちがって今はとにかくヤル気が起こらない、無気力ということのいいかえにすぎないのではないか。

だが、エネルギーが全く無くなったとは思わない。あってもそれが外への方向性を持たないということだろう。駒場祭などをとってもそれはわかる。企画数は今年も増えて史上最高だという。全くエネルギーがなかったらこうしたことは起るまい。だがその内容をみてみると、模擬店やディスコ

など、内輪でたのしくやろうというものが多いようだ。それはそれでいいことだとは思うけれどそれだけでいいとは思えない。
　それにしてもなぜこうなのか。食うや食わずの時代であれば内へのみ向かうことを許さない「外圧」が働くだろうが、現在はそういうものがなく、従ってとりあえず自分のことだけを考えていられる、というようにも言えるだろう。だが、原因をそれだけに帰するのはあまりにせっかちというものだ。10年前の大学闘争でのエネルギー爆発は、なにも飢餓に苦しむところから出たものではない。こういうことに関しては、例えば『世界』79年8月号の「青年——なぜ？」という座談会の中で精神医学や社会学の専門家達が次のように論じている。高度成長期を経て、皆ある程度裕福になり、「青年期延長」が生まれた。また高学歴化社会が到来し、そのための受験競争が激化する中で友人関係が疎になりがちなこともあって、社会性の発達が犠牲になる。一方でマスコミ文化の影響で茶の間にいながら世の中の情報を得てわかったような気になるため、社会変化への無力感というようなものを悟ってしまう。また、核家族化の進行は、過保護、特に母親の過保護をもたらし、それによってひよわで自立しにくい青年を生み出す。云々。中にはモラトリアムがあるならそれを利用して〃モラトリアム文化〃を作って実利主義的な世間にインパクトを与えればいい、とか、マスコミ文化の影響で感覚的な鋭さを身につけているからそれを生かせとかいう〃激励〃もあったけれども、では例えば感性を徹底的に追求し、何かを創造しようとしている人がどれほどいるだろうか。モラトリアムを生かしての創造よりも、その消費にあけくれている人の方が圧倒的だろう。オッサン連中にとっては〃激励〃すればそれでいいかもしれないが、激励される方としてはそうカンタンにはいかないのだ。
　こうして原因を社会的背景にもとめていくと、われわれには被害者意識が出てくる。例えば『朝日ジャーナル』78年9月8日号の中でわれわれの世代の人間が述べている。曰く、「世のオッサン連中は、敗戦あるいは大学闘争での自らの挫折をもかえりみず、われわれにもっと元気になれ、という。われわれに自分たちの挫折を強要しようというのか」「大人達はわれわれに、カゲキハの人のような〃悪い人〃になってはいけないよ、といってわれわれを育てておきながら、今になって元気になれもクソもないもんだ」たしかに、こういう気持ちはわかる。それはそれで率直なものだ。だが、これらは結局のところ愚痴に終ってしまう。いくらブーブー言ったところでわれわれにとって何の解決にもならないのだ。愚痴をこぼすよりも、われわれは今ある自分を出発点として、その内実を見つめながら、何ができるのか、何をすればいいのかを考えなくてはならないのだ。
　まず自分を疑ってみる。自分では自由だと思い込んでいても、ひょっとしたらそれは作られた自由でしかないのかもしれない。自分では人に迷惑などかけていないと信じていても、今のわれわれのモラトリアムの一方で苦しんでいる人々はいないのか。先ほどの例で言えばインドシナ難民のことを新聞で読む。日本政府はあまり援助をしていないらしく海外の評判は良くないという。そういえば、日本の企業が東南アジアなどに進出して、現地の人々をこきつかって金もうけをするために反日感情が高まっているということもどこかで聞いた。……
　自分が身を置く駒場。時々原理と反原理の衝突などで騒然となることがある。そういう時、どうせ暇なんだから帰らないでみている。そんなことでなくても、例えば駒場祭。何でもいいからとにかく参加する。
　問題を問題として受けとめるのはなかなか大へんなことだろう。時には、そこまでいかなくても盲目的に行動してみることも必要かもしれない。とにかく、外へ向かっていくところからしか自分の生き方を問うことは出来ないのだ。

時代錯誤社からのPR

時代錯誤社では，日常活動として，恒河沙を発行することを通じて，読者≒執筆者と対話を行なってきた。対話の場としての恒河沙をより効果的に機能させるために，必要とあらば，問題提起やアピールもそれなりにしてきたつもりである。

今回，駒場祭を迎えるにあたって，時代錯誤社では，こうしたふだんの活動の延長として，「『若者論』に異議なし？」と題して自由な討論の場を設けようということになった。マスコミでは，我々の世代を「シラケ世代」「やさしさの世代」などと形容するが，どうもその基調は「お前らは軟弱でひよわだ，もっとしっかりせんかい」というようなもののようだ。それに対する反論は当然あるだろうが，正直なところ我々は実際未熟で甘い，かなりドツボ的な状態なのでは，という認識を時代錯誤社では持っている。今回の企画ではその辺の本音をぶつけあい，さらにどうすればいいか，何をすればいいのかまでひろげて参加者と討論して，何らかの展望，とまではいかなくてもその手がかりくらいを得られたら，と考えている。なお，我々のみの討論ではぬけてしまいがちな視角というものもあると思われるので，本学助教授の廣松　渉氏に御出席いただき，我々とは別の立場から自由に発言していただく予定である。共に語り合おう。

11月25日（日）午後0時
159番教室

11月23日、いよいよ待ちに待った駒祭がやってきます。御家族そろってお越し下さい。さて、当誌恒河沙では数多くの企画の中からほんの少しですが読者の皆様に御紹介したいと思います。誌上に載らなかった企画のみなさま、ごめんなさい。くわしくはパンフレットを御覧下さい。

恒河沙独善（ひとりよがり）

こまさい 企画案内

❤ばか歩き大会 （53SⅡ3 エアロビクス同好会）

11月23日 am 6時45分東京駅集合
am 8時30分寒川発

歩いた歩いた延々50キロ、10時間！（有志が試歩したのです）喫茶店をやるよりはマシと思って計画しましたこの企画、「健全な肉体に健全な精神を」をねらいとしております。（シンドイのは実感）

当初は大勢10人位でにぎやかにやりたいと思っていましたが、やってみようという人、体力に自信のある人は奮って御参加下さいということです。（万一の場合を考え、車も併走させますので御安心を。）当日はおべんとうを御自参のこと。

◆X高校同窓会 （X高校何でも同好会） 117番教室

朝日新聞の「いま学校で」欄で高校生活の荒廃ぶりが生々しく報道されていたのは有名です。ところが、そこには現代マスコミの実態が隠されていたのです。

取材を受けたX高校生4人のうち、3人までが、記事の↖

❤仮装行列

11月23日 am 10時 正門前↓道玄坂↓ハチ公前

昨年度はカッパ踊りやおみこしなど、100数十人参加したこの仮装行列、賞品ではお酒が出ますしにぎやかでおめでたい雰囲気なのです。沿道を埋めつくす人々の歓呼の声に（一回でいいから）包まれてみたい人、チャンスです。

◆婦人問題——岐路に立つ女子学生 （委員会シンポ）

11月25日 am 11時〜2時 109番教室

弁護士の平山知子さんを迎えて、東大女子学生の就職の実際や、あるいは結婚にかんする問題などを考えるシンポジウムです。東大を卒業して働いている女性にアンケートをとったり（300通発送）、そういったナマの声、体験が聞けると思われます。

♣「若者論」に異議なし？——ノンポリをどう考えるか （時代錯誤社）

11月25日 pm 12時〜3時 159番教室

〝ボクはノンポリっすよ〟と堂々と言える時代になった（のかもしれません）。今や学生運動など内ゲバセクトだ、と毛嫌いされる言葉となった（かに見えます）。10年前の安田講堂をTVで見ながら「ああいう人になってはいけませんよ」と教えられた（らしい）我々は、一体本当はどのように生きているのだろう——〝政治的無関心〟を糸口に、既製の若者論をダシにして、自由に考える場にしたいと思います。哲学の廣松歩氏その他、幅広い出席者とフリートーキングを行なう予定です。

ような内容は話していないと証言しました。ここには、世の中の〃進学校〃というイメージ、虚像だけを拡大して報道しようという新聞社の姿勢が如実に示されています。これに対して母校の真の姿を訴えようとする意図で生まれたのがこの企画です。
元放送研究会の面々ですので、DJのまね事もやります。(こっちの方が中心になりそうだという話もチラホラ)

♣のど自慢大会　(東大生協)
於グランドフェスティバル　23日 pm 1時〜3時
25日 am 11時半〜1時半

駒祭恒例のど自慢大会、毎年多くの実力者を迎えて好評を博しておりますが、今年は伴奏に「音感」の協力を得ることができました。出場者の陶酔感が倍増することウケアイです。たのしい司会と多くの賞品を用意しております。アルコールなしで充分酔える人、歌唱力以外の可能性を追及したい人、青春の記念を欲する人などぜひお越し下さい。

♠競争馬——その宿命と未来　(競馬研究会)　115番教室

このサークルの日常活動は、全国的に開催される競馬の予想をし、結果をまとめることであります。一般の人々の関心は馬券の当たり外れにのみ集中するのですが、このメンバーは馬の生活、馬は何故走るのか、さらには馬の感性まで理解しようと努めています。単にレースを見るだけでなく、馬体や飼料の研究までする、とにかくウマズキな人間が集まっているのです。
当日は、天皇杯予想投票、競争馬クイズなど行ないますので馬好きな方はのぞいてみて下さい。

The 駒場祭

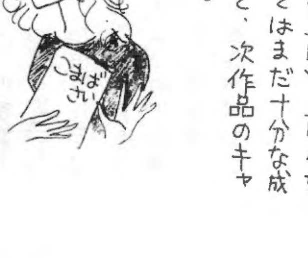
♠白竜・中山ラビコンサート　(陳さんを救う会)
11月25日 pm 5時30分〜　234番教室

白竜は在日朝鮮人2世のロックシンガーで、自らの立場に根ざしながらも日本人も共に歌える広がりのある歌を歌っています。「闇の中でも笑ってやろう」という明るさを持った歌です。中山さんは〃「家」とか「夫婦」という単位なしに男女のいい関係を考えることと、地域でくらしながら自分を失なわないでいることは、同じ問題なのかもしれない〃と言っているおねえさんです。
(私たちはこのコンサートを聞いてもらうことによって、私たちの活動を多くの人に知ってもらうこと、収入を上げて渡韓費用をつくることを目的としています。)

♥自主映画傑作名作大上映会　(東大映画研究会)
11月23日〜25日　図書館4F 416番

〃一九七九年度の自主映画界の終幕を飾るべく新作の大披露!!〃です。この東大映研は、CineCC(関東の学生映画団体の連合)に4人のスタッフを送りこみ、早大、本女、広店の旧3大勢力を抜きさって、関東では実力No.1の位置を確固たるものにしました。
今季は4本の映画製作(うち2本を駒祭上映)、上映会など幅広い活動を行ないましたが我々としてはまだ十分な成果を得たとは思っていない、というわけで、次作品のキャスト、スタッフを募集します。よろしく。
上映作品……〃CRASH〃 〃Side-B〃

(次ページにつづきます)



◆映画"朱い海"（78SⅡⅢ2）

11月23日〜25日　212番教室

8mm・カラー25分間の作品。かなり熱の入った製作で、自信作のようです。

"彼は荒々しいタッチの朱い海、その上に輝く明るい太陽を描き上げた。僕達の作品が猥褻か否かなんてのはクソクラエだ。向われるべきは、僕達が僕達の感性をどれだけ炸裂させ、どこまで押し通したかだ。"（監督・小松美火子）

♣銭形の金さん黄門組始末記（53SⅡⅢ6有志）

学館とトレーニング体育館の間あたり

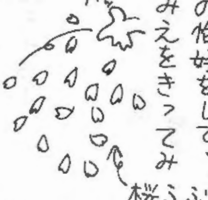
畳を10枚ほど敷きつめて賭場を開き、お客さんに遊んでもらいます。（ぜひ一度来て極道気分を味わってみて下さい。）30分に一度位、着流し姿の遊び人がサイコロにいちゃもんをつけて大乱闘、すかさず銭形平次、金さん、水戸黄門、紋二郎、近藤勇、国定忠次、森の石松、拝一刀、ウルトラマンなどがとびこんできて全員お縄にしておしまい。（他にも"あだ討ち"シーンなども用意）

ねらい→一度でいいから遠山の金さんの恰好をして、ガバッともろ肌脱いでイレズミ見せて、大みえをきってみたかった。

♠竹宮恵子at駒場祭（東大漫画愛読会）

11月24日pm2時〜4時　231番教室

お茶女、国学院等各大学の漫研代表者が竹宮恵子さんと話し合います。「地球へ…」アニメ化の話、レコードの話、「風と木の詩」休載は何故か、同性愛のお話etc. パネルディスカションです。プレゼントもあります。



KOMASAI内の「こまさい」に1つあやまりがあります。どこでせう？

♥原爆から34年—今、被爆者は（U.H.H.O）155番教室

U.H.H.Oとは University Hibakusha & Heiwa Organization。

原爆体験の風化という事態の重大さを感じた有志たちは、この夏休みに広島へ行き、被爆者から直接話を聞く機会を得ました。現在の原水禁運動の動向や日本はこれから核化するのかといった問題を考えたいと思います。当日は、原爆記念館等から借りてきた写真の展示や、自作のパンフレット配布の予定。

◆共通一次を考える（54LⅠⅡ7）113番教室

マスコミ的にとらえるのでなく、自分たかかわった問題として考えたいと思います。（クラスで約30人も参加し、予備校めぐり、総数一〇三八人回答のアンケート、大学入試センター、マスコミ等へのインタビューその他、実際に問題が教科書に載っているかを調べたり、とにかく自分の足で調べた、実のある研究のようです。）この調査結果はスライドにして当日発表します。言いたい放題コーナーもあります。

♣西淀川—公害と人間の街・（TOMOKO）212番教室

自作の映画を上映します。TOMOKOとはとくべつもの好き行動隊の略で、LⅠⅡ20組が最初の読書会だそうです。今年の夏休みに大阪西淀川へ行き、大気汚染に苦しむ患者さん達に接したことなどから、この映画を作ったということです。直接被害を受けていないように見え、公害なんて関係ないと思っている人達も、実は合成洗剤等身近な所で危険と接していることに気づいてほしい、とメンバーの一人は言っていました。

◆あすのエネルギー（54LⅠⅡ4、5）
11月23日、24日：159番　25日761番教室
エネルギー映画、講演（堺屋太一氏、福田成一氏等）、などを通して、70年代の概観と80年代の展望を考えたいと思います。参加者にはパンフレットを配布する予定。

♣講演〝子供の笑顔を消さないで―障害者と共に生活する社会を―（駒場点友会）
11月24日pm5時～7時　723番教室
講演者は福井達雨氏（止揚学園長、京大講師）。28年間障害児の教育にたずさわり、子供たちへの差別と闘って来た方です。点友会では、日本人の福祉観をテーマに、現代の福祉の問題点と、その未来像を考えたいと思います。

＊おしらせ
恒河沙では、映研等の協力を得て、駒祭で発表される自主製作映画、演劇、その他の評論、紹介をしたいと思います。（次号9号にて発表の予定）
なにせ量のタップリあります企画数ですので、見ることのできない企画もでると思います。よって、我クラス、我サークルこそは自信がある、という方々はどうか駒祭前に恒河沙に御一報下さい。

「恒河沙」創刊一周年記念事業 及び壱萬圓募金

昨年12月、クラス内雑誌として誕生した『恒河沙』も今や発行部数500、駒場唯一のコミュニティマガジンとして立派に成長いたしました。これもひとえに投稿者、愛読者の皆様の御愛顧の御蔭です。
時代錯誤社では発刊一周年記念として、駒場の地に柿や栗やすもも等の植樹をする予定です。その資金用として今回壱萬圓募金を公募いたします。一般企業にも広く公募しますので、駒場文化の創造の為、宜しくお願い申し上げます。
なお、記念事業としては、植樹の他に、900番教室での記念式典と「恒河沙一年誌」編纂 等を計画しております。

原稿と編集部員募集

☆　恒河沙編集部では原稿を大募集しています。エッセー、評論、創作 etc 何でも結構です。9号では、駒場祭をやって感じた事、考えた事等を特に大募集しています。締切は12月8日、下記宛までお送り下さい。

☆　現在、編集部員は10人を数えますが、そのうち約6人は来年の4月に本郷に逃亡する見込みで、このままでは来年4月以降の恒河沙の発行が危ぶまれます。そこで以下の三条件を満たす方に編集部への参加を呼びかけます。
1．来年も駒場にいる方（1年生でも2年生でも）　2．月一回徹夜のできる方　3．恥を恥としない方．

〒176　練馬区練馬4-1-18
小山方　時代錯誤社

何で今ごろ『いちご白書』なんだよ？

宮台真司

プレ駒場祭で「いちご白書」が上映されたと思ったら、何と駒場祭でもこの映画が上映されるようではないか、何故に今「いちご白書」なのか、と片腹痛くなるのは私だけでもあるまいが、私がこの映画を見たのは実は3年以上も前の事で、記憶も定かではないとはいうものの、とにかくほめようのなかった映画であった事だけは覚えており、以降私はこの映画は誰が見てもつまらないと思うに相違ないなどと勝手に思い込んでいたわけであるが、最近ふと何人かの者たちとこの映画について話したことがあって、この映画をほめたりする人間がかなりいるという事実に驚き、そういえば「いちご白書をもう一度」などという馬鹿〱しい歌が流行った事もある位だから、そういうことがあっても本当は不思議ではないのだ、と思い直したりもしたわけであるが、結局のところこうした映画にいかれる連中は風俗に感染しただけなのだ、という事は自明なのであって、この映画の擬似大衆性みたいなものは全て風俗としての普遍性に帰着するのだ、といいきってしまいたいほどだが、それでも風俗映画として見てあげれば、当時のアメリカの学生運動の祭典としての側面、風俗であるが故に、染まらなければアイデンティティを失うかのように幻想してしまう若者たちならぬバカモノたち、ファッションとしての運動に同化した時の居心地の良さと、それを援助する解放幻想等が描かれていて、まあ当時の風俗を良く見ているではないか、と思わせたりもしながら、その実、この作品にはイデオローグとしての作者が見え隠れしていて、それはあの醜くもおぞましい教育映画ハーツアンドマインズを作ったのと同じ「アメリカ人が特に恥かしげもなく露出するバランス感覚」の振りかざしのそぶりとなって押し出されてくるわけで、それは、一方であんまり好ましくないベトナム戦争が行われているというのにみんな黙っているというのは不健全で、そこにああいった純真な若者がでてきて一見突出してみせればもうアメリカ社会は健全さ、安心だよネ、といった感覚になっているわけで、みんながおててつないでベトナム戦争反対と言えばベトナム戦争が終結し、問題が解決するかのように愚かしくも信じ切ってしまうような、何か我々のそばにもいそうな「進歩」的リベラルの立場からのデマゴギーがこの映画の基調をきざんでいるのであって、それは例えばこの映画のまるで歴史から切り離されてしまったかのような歴史性の排斥を見れば明らかで、「気がついてみるとベトナム戦争があって、学生運動があって、気がついてみると女の子がいて……」といった感覚は、まあ風俗としての浸透性はあるとはいうものの、この映画のような形で、運動の前景にも後景にも時間を切断された風俗を配置されてしまうと、いくら映画が本来大衆にこびを売るだけで、大衆芸術の域から脱する事がないとはいえ、少しはうんざりもしようというわけだけれども、また駒祭で上映するようだし、観たい者は観りゃいいさ、たかが映画だぜ。

ついでに駒祭三日間通じて、五本、594教室で開催される自主上映会に、私の作った七十分の長編映画が「東大パロディアスユニティ？」の企画から出されているから、ヒマな者たち結集せよ！と言っておこう。題名は『ミクロコスモス』だよ。プログラムや「ぴあ」の学園祭特集を見てごらん。

（文進3A）

人物クローズアップ
寮食堂の渡辺さん

古色蒼然たる駒場寮、その中寮と北寮との間をまっすぐ行った所に寮食堂がある。今回は、この寮食堂で現場のチーフをやっている渡辺さん（通称ナベさん）を取材してみた。

まずは自己紹介から。

「渡辺千代って言います。年は58です。この寮食堂で働き始めたのは昭和29年。当時33ぐらいですね。家の事情で稼がなければならなくなって始めたんです。初任給は7千円くらいでした。当時、この食堂で味噌汁が一杯2円だった頃です」

仕事を始めた頃、つらかった事は？

「つらいって言ってもねえ。まあ初めの頃はなれなくて大変だったけどねえ。生きてゆくのに夢中だったからね。ほんとに夢中だったからつらいなんて言ってられなかったね。昔はこの食堂も20人以上働いていてね。昼なんか千八百ぐらいも出てたんだよ。ご飯を盛る時なんかこんなでかいのにいくつも炊いてそれを全部自分で盛ったんだからよく働いたもんだね。あの頃は。」

いろいろな学生と接してきた訳ですけど昔の学生はどんなだったですか。

「そうね、昔の学生はみんな学生服でシャキッてしてたね。今はなんかダラダラしてるけど、昔はみんな自治意識なんか持っててね。昔の学生にもいろいろなのがいたよ。なんとか言って色男がいたけど、すごい色男だと思っていたら、どこかの女のヒモになっちゃったし、麻雀ばっかしやってて、上野の方で麻雀で食ってるのもいるしね。」

今の学生に何か言う事はありますか。

「そうだね、麻雀するなとは言はないけど、のまれちゃだめだよ。ほどほどにして勉強しなきゃね。それに今の学生はずるいよね。昔は何かあるとすぐ警察につかまってね。よく警察へむすびを握って持ってってやったもんだけど近頃はぜんぜんないもんね。まあ時代なんだよね。」

現在、寮食堂ではバイトの人も含め9人の人が働いている。昼休みには500ほど食数が出るので手が回らず、寮委員が手伝わねばならない状態である。ナベさんは担当の揚げ物をしたり、ほかの人に指示をしたり大忙しである。暇になる2時頃からはみんなで厨房の中でお茶と菓子で世間話をしているようだ。

お経をやっているそうですが。

「池上にある本門寺に習いに行ってます。そこで10年くらいかけて一通り習ったんですけどね。職場で色々人間関係でモヤモヤしてる時なんか、話を聞きに行くと、なるほどなと思って心が落ちつくの。あんたもやってみない。今年は、休みの時に秩父の札所をまわったんですけど、さ来年には定年になるので四国の札所めぐりをやろうと思っているんです。今から楽しみにしています。」

定年後は、どうする予定なのですか。

「できたらバイトでもいいから、働きたいね。まだ体が動くのに働かないんじゃ、御天道様に申し訳ないからね。できたら、ここで続けたいんだけれどねえ。」

現在、月給は15万余円で、退職金は900万円ぐらいだそうである。家は大森でバスと電車を乗り継いで駒場まで来ている。女手一つで育てて来た息子さんも、今は駒沢大学を卒業して、仕事を持っているそうだ。いろいろ苦労をして来たらしいナベさんだが、あとは息子さんを片づける事と孫を待つのみだ。

寮食堂へ行けば、女丈夫と愛嬌が同居しているようなナベさんの大きい声が聞ける。「いただきます」「ごちそうさま」と声に出せば、「あいよ」と元気に答えてくれるだろう

【quo】

東大を問う

第四部

前回休載となった「今、再び東大を問う」は今回、処分問題という問題提起をうけて新たな視角の提示を迫られることとなった。

こうしたテーマを掲げる以上、その照射すべき対象は広くかつ深いにもかかわらず、編集部は前回は新たな視角を提示しえなかった。今回、前回のそうした結果に対する反省もこめて、「東大」という存在をみつめ直した時、浮かび上がってきたのは、「教官」という存在だった。考えてみれば、それは当然のことなのだが、われわれの第I部以来の企画は、主として学生の側からの目で追求してきたものだった。

今回、何人かの教官に本誌第6号の編集部論文についての感想・意見・批判を求めてみた。お忙しい方の多い中、今号の締切りまでに独語の山下教授と物理学の小出教授が意見を寄せて下さった。こうしたことは今後も継続していく予定である。

今回、新たに提起された問題は「処分」であった。これは実は

今、再び

前々から尾を引いているものだが、このたび総長室による処分制度検討委が具体的な検討に入ったのに対し、いわば当事者である文学部の学生、或いは各自治会がそれなりの対応をし始めたことを受けて、改めて問題がクローズアップされてきたわけである。
この問題は、東大のあり方を問い、大学の自治を考える上で非常に重要と思われる。しかし、この問題をどう考えていいのかわからない。そこで、今後この問題を考え続けるために、「『処分』を考えるために」と題して資料をつくってみた。

『10年前』と文学部問題

山下肇

文学部問題の詳細を私は知らないが、視野を広くして東大のあり方を問うことは重要だと思う。それで想起されるのはやはり10年前のことである。文問題も10年前につながるものをもってはしないだろうか。あの紛争での発端は医学部における処分の問題であったが、紛争が展開する過程で東大のもつさまざまな問題点が露呈してきた。
例えば、東大の教授の身分保証の問題などもその一例だろう。当時問題をあれだけこじらせた医学部では、評議会で決議して医学部長の辞職勧告を行なったが、ついに辞めなかった。駒場の先生たちも署名運動までやって辞職勧告に頑張ったのだが。
10年前の紛争ではいろいろなことがあった。というのも、火ダネ

は本郷だったのに、それを収拾するために走りまわって大いに実力を発揮したのは駒場の教官たちだったと思うからだ。全共闘系の人達は当面のポストに当っている学内左派の教授たちを攻撃する戦術をとり、それまでの進歩的な民主化運動を全く評価せずに、逆に右派教授たちの頑固な倫理性ばかり賞讃する有様だった。だが我々は我々なりに貫くべき原則を貫いたのである。例えば、駒場では絶対に機動隊を導入しまいと決意した。にもかかわらず、全共闘の諸君は形式論理で「機動隊導入」を勝利とする戦術をとった。彼らは我我の教授会を一晩カンヅメにし、やむなく機動隊が導入されてしまった。これは今日の学生一般の「警察アレルギー」消滅のもとになり、結局学生と教授との信頼関係がどうしようもなく裏返しにされてしまったということだろう。一つのエピソードがある。彼らが教授会をカンヅメにして機動隊が導入されたとき、学生は当然逃げたわけだが、その中に何人か逃げおくれてしまった人がいた。そのとき教授たちは、彼らに自分たちの服やオーバーをきせ、機動隊につかまらないようにまわりをかこんで一緒に外へ出て、彼らを助けた。ところが翌日になると、また昨日助けてやった当の本人が何の反省もなく同じように暴れまわっているのをみた。あいた口がふさがらなかった。ここらあたりに信頼関係の崩壊が象徴されていたようだ。それでも駒場の先生たちは学生が好きだし、いつまでも怒ったり憎んだりしているわけではない。また全共闘には本郷でも駒場でも学外者が多く、その連中が拠点にしたのでなかったらあそこまでひどくはならなかったかもしれない。

民青の諸君も相当にひどいものだった。例えば、全共闘系の諸君が寮に逃げこもうとしたとき、寮はそれに対応してしっかり自主管理しなくてはならないのに皆どこかへ消えてしまっていた。しかも後日の団交で彼らはそういう自分たちの非はかえりみないで、その責任をもっぱら学部長におしつけたりする。それは私自身の体験だから、まちがいない。また紛争の渦中ではさかんにデマをまきちらすこともあった。紛争時の自治会は民青とはいえない。あれはクラスの連合体から運動がもりあがって解決にもっていこうとしたすばらしいエネルギーだった。個人的には皆いい学生で、今ではそれぞれ自己批判すべき点は自己批判していて、会えば親しく話すけれども、民青の体質には、上からの政治的な点数かせぎ、出世主義のようなところがあるのを残念に思う。

10年前の紛争で出てきた問題は思想的総括が十分になされないまま今に至っている。未解決のままの問題も残っている。全共闘系の方はあれはアソビだったというようなことも総括として言っていたのが印象に残ってはいるが、ともかく入試中止で一年空白になったため、次の世代への継承が不十分な点は残念である。最近になってまたいろいろと言われはじめてきた「処分」の問題もその一つである。これは例の火災を機に文学部の要請でなされそうになったが、総長は3・27声明でこれを一応却下した。学内世論は処分には反対だったろう。駒場の教授会でも反対の空気が強かった。文学部の伝統的な体質にも問題の余地が残っているかもしれないし、学生と教官の信頼関係が無くなってしまっていることもまずいと思う。ただ我々としては学部自治の立場から、他学部のことに口を出すわけにはいかない。

この「処分」の問題がどうなっていくかは重要である。例えばカンニングの処置をどうするか。良心的な学生からは目にあまるカンニングを告発する投書もくる。今は規準が明確にされていないが、やはり学生自治の立場からもこれは何とかせねばならない問題だろう。キャンパスコートが学生の意見も含めて確立されていく方向が求められねばなるまい。ただし、それは単に処分すればいいというものではない。カンニングの場合、単位制度そのもののもつ問題、授業内容の問題等まで見据えねばならない。学生がゆるやかな統合体の中で自主的に問題を解決していくことのできるシステムが必要だと考える。（談）

（教養学部教授・独語）

「だれ」って「ゆく」「と」「え」

小出昭一郎

「東大って何だ」という問いに答えがあるのだろうか。「問題には必ず答えがあるはずだ」と未だに考えているような人はまさかいるまいと思うのだが、そうでもないような気がしてならない。大抵の問題には解答なんかないのであり、「東大って何だ」もその例外ではない。そのことをまず確認して、「問題提起」なら誰にだってできるけれど、解答をつくることは途方もなく難しいか、場合によっては不可能なことを断っておきたい。またそれだからこそ、「学問」などという妙なものが存在して、役に立つか立たぬかわからないことを、ああでもないこうでもないと論じて飯が食えるのではなかろうか。

勉強、とくに受験勉強というのは、解答のある問題を、解答といっしょに頭のメモリーに刻みこんでおいて、必要に応じてそれを取り出す、というコンピュータ的な営為である。学部によっては、それをそのまま延長したようなことをせっせとやっているところもある。その目標は公務員試験とか司法試験などという類の「試験」である。それに合格してエリートコースを疾走し、近頃新聞紙上を賑わしている数々の特権を入手するのが「東大」へ入る目的である。かくの如く解答は誠に明快であって、東大とは何かなどという問いを発することすらナンセンスである。そういう人は幸福であろう。なにしろ「〇〇天国はその人のためなればなり」というわけなのだから。

だが、そんなものは「学問」じゃないからぼくはやりたくない。かなり最近まで文部省で研究費の配分関係を担当していて、今はある大学の教授になっている人が「私は法学なんて学問じゃないと思いますよ。東大の先生達は何であんなに法学部をのさばらせるんですか」と言っているのを聞いたことがある。その先生は法学部出身のはずだからぼくは驚いたが、文部省の役人にだってちゃんとした人はいるな、と思ったことである。文Iの諸君、どう反論しますか。

『恒河沙』6号の記事「今、再び東大を問う」(編集部名で記された八頁ほどの記事)は、少々ステロタイプではあるけれども、部分的にはかなり正鵠を射ているとぼくは思う。だが大抵のことはそう単純ではないのだ。例えばその中に、東大の学問は役に立っているのだろうか、という「問題提起」がある。「税金で賄われているのだから最低限国民に役立つことを少しはやらなければならない」という解答らしきものも記されている。そこでぼくも問題提起したくなる。「国民に役立つ、とはどういうことですか?」と。国民とやらのうちの多数は、自民党に投票し、自衛隊は必要だと思い、元号は便利であって西暦など使うのは非国民だと考え、今の豊か?な暮しを維持するためには原発は必要で、放射性廃棄物とやらはそのうちに東大出の偉い人が何とかしてくれるに違いないと信じているのではなかろうか。そういう人達の期待に応えるには、大学は常に体制へ(彼等が選挙した政府)に全面的に協力しなくてはならないではないか。そういう意味では、東大くらい役立っている大学はないではないか。

ぼくは中井純氏を尊敬しているから、東大が右のような形で「国民に役立つ」のは甚だ悪いことだと思う。多くの学生諸君の悩みもそこにあるのではなかろうか。せっせと試験勉強のみに精励する心の貧しい人は別である。少しでも自分は何のために生き、何のため

た学問をするのか、を考えてみようとするとき、真に世のため人のため（そして同時に少しは自分のため）になるような仕事が殆んどないことに気づく。多くの若い人達がシラケたくなるのもあたり前かもしれない。さりとて、宇井純氏の真似など凡人にできるものではない。

　また、「かくも多くの経済学部卒業生が巷にいるのに、何故景気は回復しないのだろう」という問題を出されている。これも解答のない問題の一つなのだが、書いた人は、解答はあるのに経済学者が怠けているから見出せないとでも思っているのだろうか。経済学という学問が存在するのは、いつ迄たってもこういう問題が解けないからなのではあるまいか。「学問」などというのは大体そんなものであり、だからこそ大学が存在し、東大が存続しているのだ、と言える。

　なぜ解が存在しないのか、理由はいろいろあるだろうが、一つの理由は、人は顔かたちが異なる如く、考え方も全部違うという点にあると思う。例えば、多くの「国民」は今の暮らしが中流の上だと考え、革新政党などという危っかしいものにものに政権を渡して、自家用車やゴルフの楽しみ等を失ないたくない、と思っているのである。東大が今のようにあれば、そこへ入りたいという生きがいも生じるが、東大がなかったら勉強をする目標がなくなってしまう、と本気で考えている人だって多いに違いない。資本主義でボロ儲けの自由があるからこそ働き甲斐があるのであって、社会主義などになったら人生は生きるに値しない退屈なものになってしまう、というのが田中角栄氏らの哲学なのであろう。そういった雑多な考えのホモサピエンス一億の集団にスッキリあてはまる経済政策などというものを見出し得る人がいたら、それこそニュートンやアインシュタインの千倍も優れた偉大な人なのではなかろうか。東大教授などというのはちっぽけな存在であって、そんなスーパーマンの称号ではないし、この肩書きをもらったからといってそんな超能力が授かるわけではない。何十年先の日蝕は予言できても明日の天気予報ができないのが学問なのである。その理由がわからぬ東大生はいないと信じるが、同様に景気回復術などというのは天気予報の百倍も難しいことなのである。

　前記の記事にはそういったお粗末な点が多々あるにせよ、とにかく問題を提起しつづけることは大切だとぼくは思うから、これからも大いにこだわってもらいたいと希望する。ただし、見方が一面的であるということは忘れてもらいたくない。大分前にアメリカで、黒人になりすましてしばらく暮してみた白人の話を何かで読んだことがある。同じアメリカという国が、全然違って見えたという体験談である。これは極端な場合であろうが、同様なことはあらゆる所であるはずである。乗客として見た電車内と、車内販売をしながら見た電車内とは、全然異なったものであろう。東大だって、学生、院生、助手、教授、事務職員といった様々な立場から見るとき、その像は似ても似つかぬほど違ったものかもしれないのである。また、同じ学生という階層の中でも、「あるべき東大の理想像」などといったものの描き方は千差万別であろう。東大とは何か、といったような問題について語るとき、撫でた象の印象を語る群盲とならぬように気をつけるとともに、自分の経験は極めて限定されたものであることを忘れてはなるまい。

　勿論、少し離れた立場から見る方が、正しく客観的に物を把握できるということもある。いろいろな立場の人が互いに批判し合うのは非常にいいことだ。批判されて失墜するような権威なら二セ物であるから、そんなものは化けの皮をはがしたらいい。ただし、ひとの化けの皮をはがしているうちに自分の馬脚を現わすこともありうるから、自分の弱さもよく自戒しておかないと自滅する。東大の「権威」とやらにむやみに噛みつくこと自体も、もともと大したこともないものを今まで有難いと錯覚していたことを白状しているに過ぎないとも言えようか。

先週、京都で開かれた国際量子化学会議というものにぼくも出席してきた。最近、研究発表の一形態として、ポスターを使うものがある。立看一枚分くらいの大きさの衝立が各題目に割り当てられ、発表者はそこに自分の研究結果をポスターにして貼って待ち受けているのである。参加者は自分に興味のあるところへ行って、発表者にいろいろ質問するのである。それを見ながら仲間に「学園祭と同じようなもんですな」と言ったら、「全くそうですな」と同感であった。つまり国際学会や国際音楽コンクールといったところで、駒場祭の延長上にあると言えなくもないのである。もっとも近頃の学園祭は堕落して、飲み食いの店がやたらにふえたが、国際学会ではそういうことはない。ただし、会期中一度くらいはパーティーがあり、学会開催のときには企業に寄附を仰ぐのが常らしいから、どちらの方が堕落しているかにわかに断じ難いかもしれない。

まあそんなわけで、東大教授とか何とか言ったところで、何十年か前は学生だったのであり、肩書きで神通力が備わるわけではないのだから、勿体ぶったり権威を振り回わすのもおかしいし、そんなものを有難がったり憧れるのもどうかしているのである。一番いけないのは官僚と同様な秘密主義であろう。原子力の平和利用（は幻かもしれないが）には、自主・民主・公開という三原則があるが、これはすべての場合に適用できる（適用さるべき）原則と言えるかもしれない。とくに大学の運営、教育、研究にはこれらは不可欠だと思う。そうしてなお保たれる権威なら本物であろう。

何やらゴタゴタ書いて終りも近くなったが、結局ぼくには「東大とは何か」「学問とは何のためにするのか」といった根源的な問いかけには答えられそうもないことがはっきりしただけである。はじめに予防線を張っておいたから、そんな解答を期待した読者もいないだろうが、人生とは何かが答えられなければどうしようもない問題とも言えよう。そういったからといって、ぼくはこういう問題を投げ出すつもりではない。編集部の方々と同様、これからもこだわってゆくつもりである。そして一部の答えらしきものを、つくったりこわしたりし続けようと思う。国民の役には立たないが、悪いことをするよりはずっとましだろう。（教養学部教授・物理学）

代議員大会、3年9ヶ月ぶりに成立！

さる11月13日の代議院大会が、三年九月ぶりに成立した。オメデトウゴザイマス！と素直に喜びたい所だが……。成立はしたものの現実に会場にいて採決に参加したのは二百人足らずで、議場に委任した者が二百数十名もいたのである。これでは本当に成立したと言えないのではないか。それに時間が遅すぎるのも問題だろう。今回のように12時10分くらいまでかかるのでは、女の子や家の遠い人たちは採決まではいられない。学部に交渉してもっと早く始められるようしてほしい。

ヤジと怒号、セクト丸出しのやり取りには閉口させられる。これに夜の遅さが加わったら帰りたくなるのも人情と言うものであろう。

でも、やっぱし、代議員大会や自治会が今みたいでもそれで見切りをつけて自治会なんか知らないよ、と言っても駄目だろう。自治会がない大学の悲惨さは友だちから聞いた事がある。現在の自治会や代議員大会が一部のセクトによって牛耳られているからと言って自治会を捨てたら、我々学生が総体として発言する機会が失われるのだ。今、必要なのは自治会を学生総体へと奪還してゆくことなのではないだろうか。

『処分』を考えるために

編集部

はじめに

最近、学内の立看、ビラなどに「処分」の二字が頻繁に見られるようになってきている。どうやら「処分」について何か問題が持ち上がっているらしいが、何がどう問題になっているのだろうか。思えば、大学そのもののあり方を問うた十年前の東大闘争のきっかけとなったのも「処分問題」であった。このことから考えても、私達が、今、再び東大を問う際に、「処分問題」は避けて通れるような問題では決してないことは間違いないように思われる。そこで、編集部では「処分問題」を考えるための簡単な資料を作ってみることにした。なお、「処分」を考える際には、十年前の東大闘争を無視することはできないが、編集部の能力不足から、今回は触れることはできない。オユルシ下サイ

一、処分検討の開始宣言

十年前の東大闘争のきっかけとなった「処分」。しかし、闘争の鎮・後、「処分問題」は忘れ去られたかに見える。事実、この十年間、学則による処分は一度も行われていない。だが、だからといって、これまで「処分問題」が考えられなくてよかったわけではない。十年前の東大闘争のきっかけとなったのはムチャクチャとしか言いようがない教授会による一方的な学生処分（例えば、現場にいなかった学生が処分の対象となった正）だったのであり、改めて「処分」を根本的に考え直さなければ十年前の経験はその多くの意味を失ってしまうといっても過言ではあるまい。それに69年一月のいわゆる十項目確認書にさえ次のようなことが書かれているのだ。

・第四項目　今後の処分制度

一、新しい処分制度については、今後相互で検討する。ただし、大学当局は、その原則として、客観的に学生・院生の自治活動への規制手段としての役割を果してきた「教育的処分」という見地をとらぬこと。また、学生・院生の不当な自治活動への規制となる処分は行わないこと。かつ、その手続きにおいては、一方的処分はしないことを認める。

それにもかかわらず、十年間、「処分」はうっちゃっておかれた。そして、今年の三・二七総長声明で突然「処分」が問題化する。この声明は、二月十三日に総長宛に提出された、文学部上申書『文学部学生の懲戒処分について』に対するもので、『出火事件についての文学部上申についての措置』『現在の懲戒処分制度についての総長見解』『文学部出火事件に関する学生の責任について』の三つの部分からなる。以上の文書は全て『学内広報』No.四四〇に掲載されているもので、詳しくはそれを参照してもらいたいが、ここでもごく簡単にその内容を紹介してみたい。まずは、文学部上申書から。これは昨年九月二十二日の火災事件に際し、現場に居合わせた三名の文学部学生に対する処分案（二月十日の文学部教授会で採択）を今道文学部部長（当時）が総長に上申したものである。そこでは、九月二十二日現在文学部長室に坐り込みを続けていた文学部の三学生に対して「その示威行為によって学部担当者の同区域（文学部長室およびその周辺の一区画区域）内への出入りを妨害し、その日に講ずべき防火措置をふくむ十全の建物管理を阻害し、九月二十二日早朝の同区域内における出火の要因をつくった。」としてその責任を乱

し、懲戒内容として停学を提案している。

この上申に対して三月二十日の評議会で、総長から『出火事件に関する文学部上申についての措置』（以下『措置』と略す）が提案され、三月二十七日の評議会で了承された。また同時に総長は、『現在の懲戒処分制度についての総長見解』（以下『見解』と略す）を表明し、別に三月二十七日付で『文学部出火事に関する学生の責任について』（以下『責任について』と略す）も発表した。

『措置』は、文学部上申の内容は妥当としながらも、この十年間、現実に処分が行われなかったこと、処分制度が明確でないことを考慮して、今回の文学部出火事件における学生の責任を懲戒処分によって追及することは適切でないとしたものである。これにより、文学部における火災事件での学生処分なくなったが、火災現場にいたと言われる二人の学生に対して日本育英会が奨学金を停止するといった動きもでている。また、『措置』は、学部通則第二十五条（学生が本学の規則に違反し、又は学生としての本分に反する行為があったときは、学部長は、総長の命により、これを懲戒する。……）による懲戒処分は行いうるとしている。

『見解』は「現在の懲戒処分制度」に対する総長の見解を述べたものであり、「懲戒処分の対象となりうる行為は、教育・研究の場としての大学の規律・秩序を乱す行為である。」とし、その中に含まれるものとして以下のものをあげている。(1)大学の構成員に対して暴力を加える行為　(2)大学の施設、設備を占拠あるいは損壊する行為　(3)破廉恥な行為　(4)大学の試験等におけ不正行為。

『責任について』は、文学部学生院生有志の行動を逐一批判し、「本学においては、上記の経過にみられたような面会強要、拘束、暴力行為ならびに建物占拠はとうてい認めることはできない。」とし、その最後においては「新処分制度」の制定を教官、学生に提案している。

以上、三・二七声明の内容をごくごく簡略に示したわけであるが、今回の新処分制度制定の動きは、いわゆる「文学部問題」に当局の思う通りに対処することができなかった、或いはできないでいることから生じたものは明らかであり、私達はそういう背景をしっかりと見据えねばならない。

二、処分検討の一方的開始

以上のように、三・二七声明によって向坊総長は処分制度検討開始を宣言したわけであるが、その後、学生には秘密のうちに検討が進められていく。向坊総長は六月の自治会中央委員会との交渉の中で、「三・二七声明以降処分問題検討の具体的作業は行っていない」と述べたが、それは真赤な嘘で、実は九月に暴露された「五・一一改革室文書」に象徴される如く、処分制度検討は着実に進行していたのである。

「五・一一改革室文書」とは、『処分制度検討手順について』と題されたもので、処分制度についての検討課題、その検討にあたる組織、処分制度制定に至るまでの日程、また、「問題点」として学生との接触の仕方に触れている。検討課題としては、(1)懲戒処分の対象となりうる行為　(2)懲戒処分をするための手続があげられている。検討組織としては学生と直接話し合うことは任務としない総長の諮問機関という性格の委員会を設置するものとしている。日程は、現総長の任期中に決定することが望ましいとし、'79年12月までに委員会案をまとめ、'80年六月までに学生側との協議を終え、11月までに当局側での最終調整、11月末に評議会決定というプランを例として掲げている。最後に〈問題点〉という項目において学生との接触の仕方について触れ、予定期間中に調整がつかない場合には見切り発車する案もあげられている。

「五・一一改革室文書」はその内容自体非常に問題のあるものであるが、それは問わないとしても（実は非常に問いたい）文書が学生側に全く秘密にされていたということは許し難いことで、大学当

局の基本姿勢を暴露している。また、学生との接触を「問題点」ととらえるなど、「学生とはできるだけ話したくない。だけど突き上げられるのはうるさいから、適当に接触しよう。」という意図がミエミエである。

さて以上の「五・一一改革室文書」は『学内広報』No.四五五（九・二五）によれば、六月の学部長会議、七月の評議会に提出され、審議されて、九月十八日の評議会ではそれをうけて、「処分制度検討委員会」の設置が承認された。この委員会については、規則が『学内広報』No.四五五に掲載されている。同委員会は、今泉常正教授（工）を委員長とし、雄川一郎（法）、小柴昌俊（理）、加藤三郎（経）、小林善彦（養）の各教授、清水誠助教授（農）から構成され、十月十二日に第一回会議を開き、処分検討は本格的に始った。

三、大学当局の動きに対して

以上のような大学当局の動きに対して、私達学生側の動きは様々である。

養・法・経・教・理・工・看学などのいわゆる民青系自治会執行部は当局の動きをいわゆる十項目確認書に反するものという立場から抗議するものの、学内の「暴力」「無法」を一掃するために処分制度は必要として、「学生・院生の拒否権」を主眼とする三項目要求署名を行っている。その内容を左に掲げる

一、確認書を無視した処分制度の検討をしないことを確約せよ。また、改革室案の旧制度の復活の案を撤回せよ。三・二七総長見解をもって「現行制度」とする考えを撤回せよ。

一、内ゲバ殺人、暴力などの無法にたいしては全構成員の世論に依拠してあたるようにし、処分だけを唯一の手段にするな。

一、学生・院生の正当な自治活動の規制となる処分、手続きにおいて一方的な処分は行うな。また処分審査は公開とせよ。学生、院生の処分に対する拒否権を認めよ

なお、この三項目要求署名運動を推進する方針は、十一月八日の中央委員会総会において否決されている。

また、文・農・医自治会執行部等は、当局の処分検討の動きを文学部闘争などに敵対する大学管理強化の一環としてとらえ、処分制度検討委員会の即時解散、五・一一文書、三・二七声明の撤回を要求している。文学部学友会は「当局による処分というものは、そもそも一方的で政治的配慮に基づくものなのだ。そして、どんな処分の口実も必ず『規則違反』とされるのである。だから民青の言う『一方的でも政治的でもない処分』など実は存在しない。この点を見ても、日共-民青の『拒否権』幻想は明白である。」と民青系を手厳しく批判している。

駒場においては、自治会執行部が三項目要求署名運動を推進する一方、処分に反対する連絡会は「およそいかなる形であれ、当局による学生の処分を認めない」として活動している。またクラス活動者連絡会議は、一一・一三代議員大会において「当局によるいかなる教育的処分・学生処分にも反対する。」といったような内容の特別決議案を提出し、立場を鮮明にした。なお、一一・一三代議員大会では正副委員長常任委員会の提案（三項目要求と殆んど同じ）が可決されている。

こうした動きの中で、「処分」というものをどう考えたらいいのか全く見当がつかないという人も多いことと思う。何を隠そう、この筆者も、一定の「色」はあるもののはっきりとした態度をとれない一人である。だが、素朴な意見として、大学の中で何をやってもいいのかと言えば、そうではないだろうと思う。しかし、それを規制するのは当局による処分でいいのかというと、それは非常に疑問である。まあとにかくこの問題は私達学生にとってあまりに重要な問題である。無関心は決して許されることではあるまい。

（蟻）

ぼくはインテリ？

豪　秋霖

東大生でもない僕が何故この東大のミニコミ誌「コーカシャ」に投稿するはめになったのかと言えば、それはこの「コーカシャ」で中心的に働かされている奴が同じサークルで前々から原稿を依頼していたからである。愚か者の僕は気楽に「いいよ」と引受けてしまったからもうどうしようもない。その時の彼の微笑を僕は理解できなかった。そして気軽に引受けた当時は「よし、おれも中大で自治運動などやっていることだし、ひとつ東大の文学部闘争について書いてみようか」などと思っていたのだが、そんな時間的余裕がなくなってくるのと平行して、奴めの催促が鬼の様になって来るのである。

奴めは初めはニコニコと（終始ニコニコしているのだが、それは表面のとり繕いであって内心は非常にシビアな態度を取るようになって来る。）していたがメ切りまぎわはヤンワリと恫喝も掛けてくるのである。

「もう誌面はわってしまった。書いてくれないと困る。」——

「困った、困った千枚くらいじゃダメ？」

「ダメ。8枚くらい書かないと内容あるものにならない。」

（「ひっひ。8枚でも内容のないのを書いて『コーカシャ』の面目丸つぶれにしてやる。」）

「わかったよ。何とかするよ」。

しかし、何の展望もなく8枚も原稿を書くのはきびしいものですな。なんとなく小学校の時の作文を思い出しますな。前の女の子が感想文10枚も書いてるのを見て「超人だ!!」とひたすら感心していたのを思い出す。

（とかなんとか書きながら、1/4のノルマを果たした。）

さて以上のような駄文を書きつけると、O君と決定的に関係を断つ以外に互い傷つかずに済む方法はなさそうなので本論に移ろう。

世にインテリゲンチャというものは奇妙な存在だと思う。彼らはいったい何をもって世に寄与しているのだろうか？別に何かを生産しているわけではない。時たま「本」なるものを出す「本もの」のインテリゲンチャもいるみたいだ。（本を出せばインテリだという事ではないが）僕が論じたいのは中途半端な「インテリの卵」と言われる学生さんについてである。この一群のインテリゲンチャは、いろんな特色を持っているようだ。

僕が大学に入ってまず見た彼らの奇妙な癖は、自分を否定したがる人がいるという事だ。特に頭の切れる人にこういう人がいるようだ。

自分がそんなレベルの頭を持った人間だと想像してみよう。

「世の中の事みんなわかる。所詮こんなもん。何が嬉しくてこんなに多くの人間がアクセクしているのだ。自分はそんなのしなくても何だってわかるし、できる。でも、そんなエリートぶるのは何と言ってもカッコ悪い!!こんな自分が謙虚に振る舞うのが実に渋く見えるだろう。そう、『尊敬』て言うんじゃなくて、『畏怖』の念に近いものを感じさせるようにとり繕ろう事が言いのだ。ナウなんだよ。」

こんな人間、一人くらい見た事ありませんか　僕はインテリゲンチャ様々あれど、この手のタイプのインテリが一番嫌いだ。だって想像してみなさいよ。これくらいイモ臭いインテリはないじゃないですか。自分の能力を真に謙虚にあらわすのではなく、カッコつけるために「謙虚ぶる」……。

でもこう言う人間に限って極めて自己中心的で、ミエッぱりな人間に違いない。同じインテリゲンチャたちは、かつて徹底的に自らのインテリ性を否定しようとした。あの東大闘争がそうである。山本義隆はもう、それは抜群のインテリで将来の日本の頭脳たり得るんじゃないかと言うくらいの頭のよさだった。で、又徹底的に自己否定し抜こうとした。その心理は多かれ少なかれ闘争に参加した学生一人一人に共通した心境だったに違いない。

しかし残念ながら今の所、僕はこんな『ゴリッ』としたインテリにお目にかかった事はない。中途半端に自己否定するインテリ群は腐る程みてきたが、徹底してそれをやり抜こうとしているインテリには、まだお目にかかった事がない。僕が徹底的に批判したい対象は、こうした中途半端な『自己否定』のインテリ共の事だ。

よく間違う人がいる。インテリの『自己否定』ってのは、かつての全共闘やその潮流をくむ人々の特色と考えている人がいるが、それは間違いだと思う。かの民青だって『自己否定』論者（それも無自覚な！）の一人なのである。彼らと全共闘が生み出した『自己否定』は、その否定する対象を異にするのである。「大学と個」。この関係をいかに解明するのか?!つまり共に主要な関心事は「自己のあるべき生き方」、であって、彼らの言う主体性とかは、つまる所「個人の関心」と言い換えてもいいものに過ぎない。違いをあげれば、一方は急進的にヨリラディカルに（根底的に）、他方は緩慢に……

レーニンは、「インテリゲンチャがインテリゲンチャと呼ばれるゆえんは、彼らが誰よりも意識的に社会全体における階級利害と政治的グループ分けの発展を反映し表現する点にあるからである。……」（全集Vol7：P32）

このインテリゲンチャの規定によれば、ある意味では学生は全てインテリの資格を持つ事になる。（まあまあ顔を赤らめないで、君もインテリなんだそうですぞ）「無関心派」なる一群も又一つの政治的グループの反映なのだから。

そして、中途半端な『自己否定』論者は何を対象にして『自己否定』しようとするのだろうか？それは過去の自己の『いやらーさ』であり自己の『罪深き』過去である。「自分はこの社会の中で人間性を喪失して来た。だから、そんな今現在の自己を否定して新たなヒューマニズム豊かな自分に生まれかわるのだ！」

こういう人々を僕は、「タチの悪いインテリ」と呼ぶ事にしている。そもそも、ヒューマニストたろう!!などと観念的に考える人間が、なぜヒューマニストたり得るのか？彼らは、この点からしても中途半端である。自己のインテリ性に自信が持ち切れないから『自己変革』なのである。インテリの存在が、矛盾を背負い込んだものである事を粉砕する為の『自己否定』ではないのである。

そして時には、抜群のインテリでありながら自分の使命を見い出し得ず『自己変革』してゆく人も出る。これはもうイヤラシサの博物館みたいなもので、自分よりもデキの悪い人間に接する時、デキの悪い人間に同化させていこうとするが、時折ポロッと実は、最も欺瞞的に見下している自己をさらけだしたりする。そして、それを出さない為よけい、卑下していき、卑下していく事に「ヒューマニズム」を見出していったりする。こうなると、もう一つの「かたわ」になってしまうのである。

まとまらない、雑感風のインテリ観を書いてみたが、自分は、最後に書いたタチの悪いインテリ共しか、見た事がない。残念なことである。東大の文学部を初めとする先進的学生諸君に期待する事は、知性の叛乱の再現にとどまらず、一方でのインテリの線の細さ……（これは何に起因しているのか？おそらく、その社会的な存在がそもそも確固たる基盤をもたない所からきているのだろうか…。）…を克服した闘争へと進んでいかれん事である。

80年を迎えんとする中にあって、東大学生運動は第二の山本義隆を生み出すであろう。

【中央大学4年】

増殖システム

アルミカン

ものすごいアイデアが浮んで来ました。こんなアイデアは一年に一個ぐらいしか浮かびません。非常に独創的です。では、落ちついて読んで、できれば賛成して下さい。

■生まれる時点では♂が♀の1.5倍だが、20才ごろになると1.0倍になる。人間についてこんなような話しを聞いたことがありますが、1.0倍になるためには途中で死ぬ人がいるわけで悲しみにたえません。ではどうすればよいのか？

クローニングはまだできていませんが、やがてできるでしょう。1/3の女性が有性生殖でなくクローンで次代を生めばよいのです。女性のクローンであれば必ず女性なのですから。

モナリザ　♀×1＋♂×2→4
アニマ　♀×1＋♂×0→1
イブ　♀×1＋♂×1→1
→ ♀2 ♂3

表のように3つの系からなる増殖システムを人間がとればよいのです。

■さて、1/3の♂が途中で死ぬ必然性をなくすことができましたがモナリザとかアニマとかイブというのは何のつもりでしょうか？それに4対1でなく3対2でも2対3でも1対4でも他の実数でもよいはずではないでしょうか？

実はこの数値は夏目漱石を特集した雑誌から、そしてこの名称はルイスキャロルを特集した雑誌からいくぶん趣味的にこじつけたものです。漱石は恋愛小説ばかり書いていたそうです。そしてたびたび♂は他の♂に対する嫉妬から♀に対して愛情を主張するそうです。♂と♀から社会的関係を除けば増殖への整合的な行動による関係のみが残るという考え方に対する反発でしょう。僕はそれに賛成なので、同様に反発を感じる考え方にとって自然なイブの系を減少させたのです。3対2では、♂にとってモナリザ系の方が遺伝情報が伝達しにくくなります。

アニマとしてのアリスというものを読むとユングがアニマの発達の段階として、イブ↓ヘレナ↓マリア↓モナリザといったというのがあって、それだけを見ると愛が普遍化して最後には叡知へと、というわかりやすい図式になるので偏差のとぼしいヘレナとマリアをアニマという記号で置きかえて用いました。

■現在ではトウタ圧が専門化した男性を基準に働いていて女性がそれを緩和しているようですが新しいシステムを採用すれば全的な女性を基準にトウタ圧が働くので危険が減少するのではないかと思います。

アイデアにすぎず実験データがありませんが「結婚する気でもないのに異性と1対1でつきあうなんて疲れる。」という意見に対する賛否が♂で100%賛成♀で67%賛成となれば、正しいことになるのではないでしょうか？

たぶん正しいとして、法律が変れば、(真子ちゃんが悪い子にだまされているのを遠くで見ていることしかできない男)という人などは大変喜ぶのではないかと思います。それから、知性の欠乏した女性をイブと呼び、情感の欠乏した女性をアニマと呼び、残りをモナリザと呼ぶことにすると流行語にならないでしょうか？(おわり)

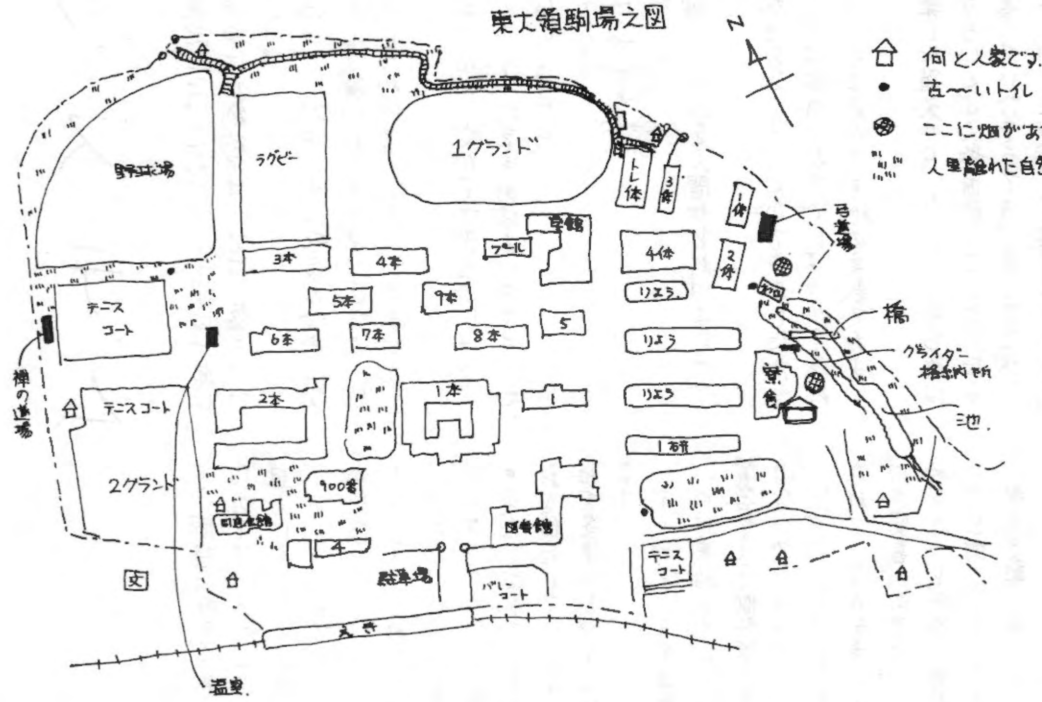
参考文献　K．ローレンツ「攻撃」11章
ユリイカ77．11「夏目漱石」
ユリイカ78．12「ルイスキャロル」
唐津一「システム工学」．

(54SI)

discover OMABA

by
へんしゅうぶ

東大領駒場之図



□ 本当に「駒場」を知ってる?

駒場には、学生だけで7000人、教職員も含めると、ちょっと実感もできないくらいたくさんの人がいます。

ところであなたは駒場の広さを実感できますか。毎日通っているくせに、授業を受けている教室のまわりしか知らないんじゃありませんか。キャンパスの一番端っこの、東大の領地と、お隣りさんの領地の境目までいったことはありますか。

残念ながら知ってるのは門だけという我々編集部では、ついに一念発起して、駒場全域大探険を決行、ここに駒場キャンパス内の秘境を大公開しようというわけです。

□ 駒場には、自然がいっぱい

だんだんと緑が少なくなっていく東京ですが、うれしいことに駒場にはまだまだ緑がたくさんあります。それは校舎のまわりにかなりたくさん木が植えてあるのを見るだけでもわかるけど、「植えてある」というのではなく、「生えている」、まさに「

K

自然」という所も駒場にはまだけっこう残っているのだ。それは校舎の集中してるキャンパス中心ではなく、キャンパスの辺縁部です。

お昼の銀杏並木前や生協のさわがしさはイヤですね。一人静かにものを考えたり、散歩をしたいとき、本を読みたいけど、図書館のおさえつけるような雰囲気はナア、というとき。そんなときあなたはどこへいきますか。

駒場公園なんかもいいけど、次の授業にまに合うかな、なんてとき、構内にも静かな公園があります。それは図書館のウラ、一研のとなりです。木がまばらに生えていて、何となく自然の中というムード・ベンチがチラホラとさりげなく置いてあって、2人連れもいいかも知れない。くずれかけた日除けや、もう使われていない古い井戸など、ここがあの喧噪と隣り合わせの場所とは思えないくらいです。

□サイクリングもできる

考えごとをしながら散歩をする。いいものですね。構内にもピッタリの場所がありました。キャンパスの北側の一番外側の、地図の上で▥で書いてある道。ラグビー場の横の道から入っていって、途中の立入禁止標識にも負けずに行くと、広い道が、幅1m位の小道になります。グラウンドが道から見えかくれし、まわりの木は原始のままという感じ、山の中の道の雰囲気。一ケ所木が倒れて、その下を道がくぐっています。狭い道ですが、アスファルトがはってあるので、自転車で走るのも楽しい。500mほどで、トレーニング体育館のウラに出ます。

□池のほとりで

「えっ駒場に池？」と言う人もあるかもしれないけど、駒寮のウラの少しさがった所に、うっそうとした林に守られて池がある。今は水が少なくなって、川になってるけど。本当はここはできるだけ秘密にしておきたい。それぐらい浮世離れしていて、彼・彼女といっしょに行くのもいいかも。鳥がいっぱいいて、池には橋もかかってる。もっとも道は歩きにくいけどね。橋をわたってむこう側に行くと、ますます荒れ地という感じ。最もさきにはそれほど行けないけど。

ここに行く時は、バードコールも忘れずに。

回 こんな所にこんな物が

そもそもこんな風に駒場を探検してみようと思ったのは、駒寮の屋上ってどうなってるんだろっ。そう言えば知らないなあ。駒場の中って実は全然知らない所ばっかだなあ。こう思ったから出した。

地図を見てもらえばわかるけど、合の記号がけっこうたくさんありますね。これみんな人の家なんです。守衛のおじさんや寮のオバサン達、こんな人たちが結構構内に住んでるんですね。寮食堂の裏や、風呂場のウラに、何と畑があるんです。お花と野菜が、半分くらいずつ植わってきました。そういえば、明寮ウラの大きなエントツの建物。あれが寮のオフロだって知ってる人は少ないんじゃないかな。

回 ウサギ、そしてニワトリまで

構内に育児所があることは知ってる人もいるでしょう。でも、探検途中でビックリしたのは、裏門の、守衛所のウラのおうちの庭に、ウサギさんがいるのを見つけた時です。大きな丸々としたウサギさんで、小さなウサギ小屋では、かわいそうな位でした。でももっと驚いたのは、寮のオフロの裏に行ってみたら、向こうからニワトリさんがトコトコ歩いてきた時です。別につながれてもいないで、次にそばを通った時は、2体のウラを散歩してきました。

回 ヤブもありました。

テニスコートを使ったことのある人なら、コートの裏が、すごいヤブなのを知ってますわ。幅10mくらいのものですが、野球場の方からなら簡単に入れます。ここには古い便所が建っていて、そこを通っていく事もできます。めったに人もこない所のようですが、個人的には好きな所です。ここのはずれには大きなススキがかたまって生えていて、学内でススキの生えるのは、ここぐらいじゃないでしょうか。

古い便所は、寮のウラと、矢内原門のところにもあって、ここはまだ使われていきます。

回 洋式トイレもあります. etc…

便所の話が出たついでに、最近はかなり洋式便器が普及してきて、学校にある和式では、どうも気分が出ないという人もいるでしょう。でも御安心、学内にも何か所かあるのです。駒寮、一本・一研でみつかりました。皆さんもさがしてみましょう。一研のトイレは、さすがに設備が整っていて、中に灰皿まであります。

又、テニスコートの隣りの柵の中、何に使うのか、ここには温室があって、内に緑が茂ってます。

最後に寮の屋上に登ってみました。崩れ落ちそうな小さな物干しがあるだけですが、静かでいい所です。誰でも入れるので、景色、学内の光景を楽しむのもいいでしょう。ただ、何でわざわざ屋上に玉じゃりをしくのか、それだけが不思議でした。（邑こ）

> 校内の自然を守ろう!! ゴミきらい!!

みんなにきいてほしいひとりごと

田中 由利

前号堂前標さんの『女子大生』という言葉にあなたは何を感じるか」は私の生活に内的にも外的にも大きな波紋を投ずることになった。その経過をここにしるしたい。

＊PARTⅠ　非常に個人的なおしゃべり（並びに訂正）

「恒河沙に女性の大学における立場を問う文が載るそうだ。なんでもその中で合コン批判が述べられているとか……」――

何？合コン批判だって？私は好奇心をかきたてられる思いがした。私はクラスで女一人、なぜかコンパ委員をやっており、合コンを主催したこともある。現代の風潮である「ことなかれ主義」とやらにどっぷりつかっている私は、「女の私が他の女子大との合コンに出るなぞばからしいな。」と思いつつも「まあ、クラスの人が楽しければそれでいいことにしよう。」とわりきっていた。他のクラスの女性から「よくやるわねえ」とあきれられることもしばしばであったが、そんな時には心ひそかに「女でありながら合コンを主催するということは、なかなか味のあることではないか。私の寛大さを示すようなものだ！」と自己を慰めていた。

しかし一回に千円札が二枚、三枚とさいふの中から流れ出していく時は、あのRとかいう店の薄っぺらいサラミソーセージをうらめしく思うと同時に、そこは社交家の私のことである。「こんなことで波風を立てるのはバカさ、黙っているのが一番だ。」

ところが何とこのたび合コンを公の場で批判しようという人が現われてくれたのである。私は自分の手をよごさずに日頃のうっぷんをはらせることができると思いたまらなく愉快になった。まさに願ったりかなったりというところである。

さて実際に「女子大生……」を読み始めた時、私は色を失なった。（やはり腹黒い人間というのがドタン場でしっぺ返しをくらうというのは本当であった。やはり神はいるのだろうか？こいつは余談！）「あるクラスでは女性が一人で、クラスの男性のために合コンの計画をさせられ、自分の楽しみは皆無なのに金を払って合コンにも行き献身的奉仕をしている。」ここまで読んではたと考えた。「献身的奉仕？」人からそういう風に見られるのも悪い気はしない。「さしずめ悲劇のヒロインといったところだな。」と私はほくそ笑んだ。そうだ。ここまではよかった。問題は次の一文であった。「それなのにふだんは話もしてもらえない。いいように利用されている。」

「まずい！」私はわめいた。これは訂正をしてもらわんと、恒河沙の読者から私のクラスの人たちが誤解をうけるし、そうなれば、私自身のクラスの立場もきわめてあやうくなるのである。

実際、この文の解釈はまちがっていた。私はクラスでこの様なひどい待遇はうけていない。私はクラス活動に積極的な人間でないのだが（おそらくは例の日和見主義的な理由で！）それにもかかわらず、読書会だ、駒場祭の企画だと機会あるたびに必ず声をかけてもらっている。（彼らに対し「いいように利用している」という評価は残酷であるとここで明らかにしておこう。）

私は一文を訂正しようと「女子大生……」の著者に交渉し、結局私がクラスにわび状を出し、次号の恒河沙でその訂正を載せることを承認してもらった。こうして一件落着したのであったが、今まで馬

車馬のごとくつっ走ってきた私はふと首をかしげた。「私は何かを見落し」てきたのではないか?」しかしそこは例の軟弱さでもってこう結論を下すのだった。「クラスノ立場ハ一応安泰。コレ以上深ク考ヘルコトナイノダ。何ゴトモ妥協ガ大切ナ世ノ中。デナケリャ人間ツラクテ生キテイケナイモノ。」

＊PARTⅡ　しかし暇は人間に反省を強いるものなのです

「女子大生……」の文が恒河沙に掲載されてからの君の行動は腑に落ちないね。君は今まで多少なりとも合コンに疑問を感じてきたはずだ。半ば「慣習化」されている合コン――それを改めて「問題化」することの意義を君こそは理解していると思う。

しかし今の君を見ていると、たかが一文、それがクラスに於ける君の立場をまずくするからと言って、そのことのみに夢中になり、肝心の君の前に提起された問題を忘れてしまっているように思えてならない。

今私は「たかが一文」と言ったが君はこういう言い方に反発を感じることだろう。君は私にこう言った。「大きな運動、改革を推し進めていく時には、個人の微妙な感情というものはとかく無視されがちだ。個人的な事情や感情は、一般的真理をめざす大きな流れの中にあってはおし流されてしまう傾向があるように思う。個人的な事情やら感情にこだわる者は臆病なるエゴイストとレッテル張りされて運動から脱落していく。しかし、本当に改革をなしとげよう、運動を推しすすめていこうとするならば「個人」というものをもっと大切にしなければならぬはずだ」そうだ、君はそう言うことで、「合コン」やら「女子大生」をうんぬんするよりも、訂正のためにかけずりまわっていた醜い自分の行為を正当化しようとしているのだ。

なるほど君の言う「運動と個人の関係」の議論はそれなりにもっともな点があるように思う。君のクラスに対して誤った評価がなされていたならば、それを訂正するのが君の義務であるし、又もし君自身がクラスの者から誤解をうけるようなことがあるのなら、それを解くのは君の権利でもあるだろう。

しかるに、君は個人的な事情にこだわるばかりで、結局のところ一般的真理を追求するところまではいかなかったのだ。君は訂正文にこだわるだけではなく、あの「女子大生……」の記事に賛同できる部分があればそれを訴えることも又必要だったのだ。

何も賛同しなくても、意見が異なるところがあればそれを主張すればよい。要は君が問題の身近にいる人間として(何しろ君はコンパ委員なんだからね。)提起された問題そのものに対し、何らかの反応を示すことなのだ。

君が――いや実のところ君に限らず、問題を提起された者すべてに言えることなのだが――反応を示さなければ、せっかくここで「問題化」されたことが、又やみに葬られてしまう。そのつみ重ねが現代の日和見主義的風潮を生んだのだ。そうじゃないかね?

＊PARTⅡ　合コンについて

(いやあ、実は私は「女子大生……」の筆者のように男女平等・女性解放に原点をおくようなみごとな合コン批判はできないのです。恥しいことだが女性解放についてもしっかりした自分の考えをもっていないというのが本当のところ。したがって私の合コン批判はきわめて低次元のものにならざるを得ないが、(物価高の今日二、三千円出して合コンに行く価値があるかどうか)ふところの寂しい学生は真剣に考える必要があると思って筆をとった次第である。)

酒――とは我々にとって何なのか。酒なくして合コンはありえずしたがって私はまず何はともあれ酒の議論から始めたいと思う。

酒は人のかたくなな心をときほぐす。酒はいかにも文明人らしい殻を人間からとりのぞき生来の人間を発掘する。そして酒は孤独な人間の魂をよび集め、そこに一つの和をつくる。

まことに酒とは不思議なものである。我々のようにある程度人間が完成されてしまっており、世間体なぞも気にしだす年頃になって、本心を語れる友人を持ちたいと思うなら、これは酒の力を借りるのが一番手っ取り早いように思う。

　クラス内でコンパをしたり、サークル内でコンパをする。これは有意義なことであると私は信じる。酒のために舌まわりがよくなり酒の席ならではの話がとび出すこともあるかもしれぬ。いやそうでなくても、みなで酔う中である一体感が生まれること自体すばらしいことであると私は思う。

　さて問題は合コンにおいても酒が同じ様な役目を果たすかどうかということになるがこの答えは私の経験から言えば「否」である。なぜかと言えば、初対面の席にあっては女は酒をほとんど飲まないのが普通であるからである。男性諸君の方は「注文しただけの酒は飲まねばもったいない」程度に気軽に考えてマイペースで酒を飲む。その結果どういうことがおこっているか？コンパの席で自分一人しらふであったらどうか想像していただきたい。酒の席に出ていながら酒をのまぬ人間というのはまことにふとどきなのであるが、それはともかく、しらふの人間は酒の入った人間がアホに見えるものなのである。そこで男性のみが心をときほぐし、あれやこれや話しかけていっても女性の方はいっこうに気分がのらないということがよくあるように思う。

　会話が、発展しないと、相手の性格もわからないし、その結果、容姿にのみ目がいってしまうということもあるのではないか？（半分冗談！）一般的には酒は会話を楽しくする力をもつものだが、合同コンパに限って言えば、酒は逆効果になっている。

　「女の方が上品ぶって酒をのまぬのが悪い。今度から酒を飲ませよう」などと考える人に対してうまく反論できないが、そういう手段を用いた時、お互い酔いから醒めた後の虚脱感はいかばかりかと思う。

真に異性の友人を求めるならば、その時酒の力を借りることはあまりうまいやり方ではない。ある女子大生によれば、計画などよく練って合同ハイキングに行くのは有意義だということだった。（もっともあの「女子大生…」に書かれていた、クラス遠足をすりかえての合同ハイキングなどは話の外である。）合コンに固執せず、別の意義ある計画を生み出しても良いのではないか。

　合コン、合ハイの原点も「多くの人と会話することで視野を広める」ことにあると思う。その原点に立ち返ってみれば、今「視習化」されている合コン、合ハイにもさまざまな問題点がうき上がってくるように思う。

（54ＬＩ）

コウコクのらん

演劇集団 **漠**

冬季公演 於駒場小劇場

11月30日～12月2日

「**清怨夜曲**」

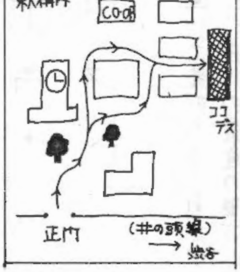
11月30日(金) 6時
12月1日(土) 4時
　　2日(日) 4時

前売・予約500円　当日600円
(前売券は生協もしくは団員へ)
予約、問合せ TEL(七三一)ー二五八五 尘玉

☆本誌御持参の方は前売料金で御覧になれます。

新人募集!!

☆キャスト・スタッフ共可
☆経験、所属大学不問
☆当方、東大駒場を拠点に活動中
☆次回公演
　4月または5月を予定



ニヒリズムを考える

コンポラ・フォト

と言っても、決して冗慢なる哲学用語でもって諸賢の魂を乱すような真似はしないつもりだし、第一私自身そのような能力を持ち合わせてもいない。私がここで言わんとするのは、ニーチェの如くにニヒリズムの克服云々ではなく、その前の段階、つまりニヒリズムとはどんなものかについて、その由来を中心に私の持論を披露していこうと思うわけである。その解明過程において、もしかすると克服云々に関する手がかりめいたものが彷彿するかもしれない。だが、ここで注意しておくが、私の克服法なるものが仮にあったとしても、それは決して個人個人に対する処方ではなく、むしろ社会的要因を変えることによるニヒリズム撲滅への期待なのである。ニーチェとしては、超人の到来を期するが、それはあまりにもばく然とし、あまりにも手のかかる処方ではないかと私は思うのだ。元来楽天的な私には、もう少し具体的・現実的で簡便な方法があるのではないかという気がする。

ニヒリズムが叫ばれるようになってから久しい。だがそれはまぎれもなく近代の所産であり、現代文明がある程度助長している状態を想起することもできよう。そして現代文明は、決して世界一律に成長したのではなく、ある中心から伝播したものであることは疑いの余地がないと思う。されば当然、ニヒリズムにも伝播の中心があったのではないかと考えられるだろう。その中心は刻々と移り変っているかもしれない。文化の爛熟から再創造への過程が随所に認められる以上、それは十分に考えられる。そこでまず現代に視点を据えてみよう。世界的にみれば、早くから画一主義が云々されたアメリカ、軽薄なる流行を絶えず散発したパリ、古代の遺産の重さに耐えかねるギリシア、イタリアあたりが考えられるかと思う。もちろん他にも多いだろうが、私はこの程度にしか挙げられない。アメリカに関しては、流行の中心がパリからニューヨークへ移ったとも言うから、それが本当なら、ますます比重が大きくなったといえるだろう。また、中国においても、指導陣の政権争いが昂じて、いささか共産主義の亀裂、それがニヒリズムを生みつつあるが、世界の中心となるまでには至ってないようである。

さて、我々は最も身近な所に、もう一つの大中心地があることに注目せねばならない。それは関西である。現代日本において、関西ほどニヒリズムを散布した悪の根源はないと思う。これ以下は、関西がいかにニヒリズムの中心としてのウエイトを占めるか、その原因を述べるとともに、できれば今後の課題をも少々あげつらってみようと思う。されば決して国際的対策にはならないと思うが、それでも少なくとも国内において、これまで誰も指摘しなかった要因を明らかにしてみたい。

I、言語学的背景

まず何といっても言語学的背景を考えることが先決だろう。諸悪の元凶は関西弁である。確かに商人の町大坂では活気を見せているなどと言われるが、それは高度経済成長以前の話であり、低成長期の今日、大坂へ行ってみれば万事御理解いただけると思う。

――お安うしときますさかいに
――もうかってまっか
――おおきにおおきに
と威勢よくしゃべっても、今日ではその裏付けが消滅しており、言葉の響きもうつろである。それは雰囲気だけでもすぐわかる。関西弁は、確かに感情を表現するにはもってこいの感触をもつ。情緒あふれる人間臭さがこもっていて非常にいいと思う。しかし感情もないのに発せられる関西弁は実に不愉快である。言語は無意識のうちに人間の精神構造に影響を与える。私が第一に関西弁を攻撃するゆえんである。

ところで関西弁には、その歴史性から当然のように、非常に審美性がある。物に感動した時に、標準語では「いいなあ」と言い、関西弁では「ええなあ」と言う。このとき、イ音よりもエ音の方が、口の開きも自然であり、それだけはっきりと感情を吐息にのせることができる。それゆえ、しかるべき背景のもとでは、標準語よりも伝達能力において秀れている。つまりそれだけ審美的なのである。だから感動が薄れると、形骸だけ美しい関西弁は、やたらと仰々しくなる。退屈したような反論に至っては次の通りである。

――そんなことゆうたかてさあ……

何とまあシラけた言動であろうか。

まあ、関西弁の審美性は単語にも見られる。

ここで少々フロイトの理論を採用しよう。我々の日常的行動は無意識の性衝動によっているわけであるから、その性的対象物のクライマックス、すなわち女性のナニについて考えてみようと思う。ご承知の通り、標準語では〇ンコである。非常に家庭的で且つ衛生的な響きをもつような感じであろう。東北弁ではベンチョ、九州弁ではボボというらしい。これらは、何か不潔であるが、それでも土臭さから転じて生命力、繁殖を象徴するような神秘的余韻を持つ言葉だと思う。貴族文化から逃れて、比較的自由に享楽できた原始以来の地方の性観念を如実に含み、表わしているという気がする。関西ではオメコという。この発祥は今日の三重県あたりと聞くが、それはおそらく貴族文化によく合う審美性をもっていたからなのだろうか、今や西日本全域で通用しているようである。私としては、オメコのメのあたりに、非常に女性らしい香りを感じるが、コのあたりに、非常に女性らしい香りを感じるが、コのあたりに、少々俗っぽい不潔な側面を感じる。しかしこの相反する調子が、なぜか見事にマッチしており、実に審美的な印象があると思う。

このように、関西の性文化は異常に耽美的であり、さればそれが必然的に日常生活にまで波及したと考えても決して過言ではあるまい。してみれば、今日の日本のニヒリズムを生んだ元凶は関西弁であり、オメコなのである。審美性は、低成長期の言語には不向きの要素だからである。(直、断っておくが、ここでフロイトの精神分析をもちだしたのは、決してそれを信奉しているからではなく、単なる趣味のでっちあげに他ならないのである。)

少なくとも、とどめを刺し忘れたような響きをもつ関西弁の罪状は、元来関西人である私には非常によく理解できる。間の抜けたような性格が愛されるからこそ、落語界は関西弁の天国なのである。

II. 風土的背景

関西は気候が穏やかである。夏の暑さは全国的なものだが、冬とて、氷点を下ることはめったにない。先日東北へ旅した折、盛岡東効外の岩洞湖付近では、毎冬マイナス十度ぐらいになると聞いたが、私には全く想像もつかない。風土的背景といっても、別に低成長期にようやく始まったわけではないが、それまでは心理的緊張に見合う肉体的安楽としての効用をもたらしていたものが、今度は一方的に肉体麻痺をもたらすことになってしまったのである。気候的条件は同時に、建設的気迫をも奪ってしまった。後に残ったものは、著たされない性衝動のみである。それゆえ、京都洛南や大坂某所の[illegible]

れ場が最近観光を浴びるようになったし、伊勢路には国際秘宝館などという得体の知れぬオモチャ博物館が出来たのである。また話が怪しくなった。しかしともかく、ニヒリズム関西発生説に対して気候の占めるシェアは大きい。

また、阪神工業地帯の伸び悩みから来る雰囲気も見逃せないと思われる。以上のように関西の風土のもつ意味は深長なのである。

Ⅲ. 歴史的背景

京都の人間は打算的だといわれる。平安遷都以来、この地には外部から実に様々な権力者が入り込んできた。藤原氏、平氏、足利氏、叡山、織田信長、豊臣秀吉……。皇室を中心とした貴族、さらに商人達は全く武力を持たなかったため、権力にすがって生きる他に道はなかったのである。そして、権力者の選択を誤れば破滅に至るのであるから、その判断力はおのずと大変肥えたものになってきたのである。彼らはこうした心境でもって、更に明治以降の政府に接してきたし、今でもそういう感情が潜在的にあることは否めない。また最近まで彼らにとって権力とは、実体化したものではなくなってきていた。政府にたいする忠誠といっても、ばく然としたものであるし、第一京都内部には政府があるわけではないのだから、必然的に非実体化する。彼らに残ったのは、所謂打算性のみである。ところが低成長期には、そうした打算も大した意味をなさない。そこに悲劇が生じたのである。こうして歴史性に裏付けられたニヒリズムが京都から広がることになるのである。

また、歴史的伝統の存在自体、関西人に優越感をもたらしはしたものの、今やそれが悪あがきにも似た敗北主義に成り下がってしまった以上、ますますニヒリズムに拍車をかけることになったということも考えられるだろう。

他にも種々の背景が考えられることだと思うが、これらを考察した上で、さてその処方はいかにと腰をおろして考えてみるのもおもしろいと思う。ところで最初に述べた通り、私はニヒリズムの克服などという大それた発言をするつもりは毛頭ないのである。私自身は、人間にニヒリズムはつきものだと考えている。たとえ個人的に克服しても、全員に期待するのはまず不可能である。どうも、ニヒリズムと聞いて撲滅！と色めきたつ者は日本人に甚しく見られるようである。しかし、イザヤ・ベンダサンが『日本人とユダヤ人』で述べる通り、日本人には全員一致の議決が最も強く、正しく、拘束力があると考える傾向があるが、しかしそれは明らかな偏見なのである。そこで私としては、関西という要素をいじくり回すことで、はたして全体的傾向としてのニヒリズムがどう動くのかを考えてみたいだけなのである。もちろん、いじくり回すといっても、すでにどうしようもない要因（気候・歴史など）ではなく、可変性を持つものにだけ言及してみたいと思うのである。

まず言語である。文化の爛熟、退廃を象徴する表現をやめるべきではなかろうか。と言えば必ず伝統の方言愛好主義者からお叱りの言葉を頂くと思うから、仮に「やめる」とすればどうなるか考えてみるにとどめよう。つまり、オメコをやめてOンコに統一するのである。スケベマン同士の隠語がOンコならば友人同士を媒介とした性教育は、実に家庭的な響き、衛生的な雰囲気の下で進行するはずであろう。また、この語には、オメコに比べて何か乾いたような軽薄さがあり、性を喜劇として把握する態度に相通じるものがあると思う。されば関西弁の猥談が持つ陰湿で深刻な、何か悪い事をしているかのような焦りから解放されることになり、友人同志のみならず、親子、果ては異性の友人同志にもかくの如き会話が成立し得るのではあるまいか。人間疎遠の叫ばれる今日、猥談の持つ役割は甚大だと思うがどうだろうか。また、オメコには何やらしっとりとした男

囲気から神秘性をかもし出すことも考えられるが、これは下手をすると、性に対する異常期待による不能もしくは幻滅をさえも生む危険性があるのだ。オメコをやめてOンコにするのは以上のような効用もあるわけで、少なくとも仮にフロイト説に従うなら、日常生活の根源なる性について、人々は安らかなる休息の場を与えられ、そこに生き甲斐を見出すことが出来るようになるのである。とすれば、同時にニヒリズム解消も期待できることになる。先に述べた通り、もちろん私はフロイト信奉者ではないので、そんなことが現実に起ころとは思わない。しかし関西人にとって、標準語へ転換することで、少なくともフィーリングにおいては、ニヒリズムと違ったものを得られるはずである。と言っても、解消とまでは行かないだろう。それゆえに私の説は処方ではあり得ぬのである。実際に、根っからの江戸っ子諸君だって生き甲斐を持たぬ人は多いだろうし、標準語をしゃべっていてもニヒリズムが揺らぐような感じは恐らくないであろう。しかし関西弁との二刀流が可能な人には私の言わんとすることが非常によくわかって頂けることと思う。

次に政治である。言うまでもなく低成長期突入に伴う商工業の消沈についてであるが、この領域では私は一ぱしの俗論しか持ち合わせていない。海外援助をもっと盛んにし、ドル減らしにいそしむべきであろう。イランにおいては、インフレと革命の結果資金不足による三井物産のプロジェクト環境悪化、それに対する企業責任が取り沙汰された。そうした問題を検討することも大切だろうが、海外経済協力の遅滞がニヒリズムを引き起こすという事態はまぎれもなく進行しているのである。

次に価値観の多様化に対してメスを加える必要もあるかも知れない。俗にう客観的視点とは確かに実在しないものなのかも知れぬが、いかなる価値観をも正統化出来る議論の量産がニヒリズムに一役買っている事は事実だと思う。そこでまず日常的姿勢として勤勉であるか、遊び人であるかということの二局的対立を越える必要があるのではないか。双方とも自己を正統化できこそすれ、相手をくじく決定的議論に今なお欠けるのが実状である。それでいて、各自の態度自体には無謬性を認めているのである。この際こうした対立をやめ、両者と無縁な新しい価値観の創出を期することにしてはどうであろうか。その前途は明らかに多難であると思われる。しかしこの試みに失敗した時、われわれ人類にとって「無謬の価値観の時代」は名実共に終焉を迎えることになるであろう……と思う。それは『傍観者の時代』におけるピーター・ドラッカーの次の記述からも十分に想起されるのである。

――十六世紀末から十七世紀初めにかけてカトリシズムとプロテスタンティズムの新たな統合を目指した才気溢れる思想家たちの挫折が、五十年後における「無謬の宗教の時代」の終焉の前触れでないとどうして言い切れよう?

しかし恐れてはなるまい。いずれにせよ、今日のニヒリズム対非ニヒリズム、勤勉対遊び、という陰惨なる闘いは決して好ましくないとおもわれる。誰しもが認める秀れた価値観を求める努力が必要だ。人間には、活気を得るためにはどうしても無謬の価値観がいるのであり、そのためには非ニヒリズムの感覚は大切だ。しかしニヒリズムを解消しきるのは不可能である。するとそこに陰惨な対立が生じ、ニヒリズム信奉者は「自らの劣悪さに対する腹立ちとよりすぐれた者に対する羨望を行動の動機としている人間の屑、プロレタリアのごろつき」とあなどられ、社会からますます離反するということになってしまう。これでは何にもならない。我々は今や大いなる転機にさしかかっているといえるだろう。私は価値観多様化への手入れについて、決して個人的努力を要求したのみではない。具体的な外的要因として、権力者の介入を秘かに期待するのである。多くの議論を呼ぶだろうことは明白だが、試してみる価値はあるかも知れない。

さて、以上は至極観念的な試みと言えようが、もう少し直情的な

ものとして、視覚的芸術的方法を示してみたいと思う。（とは言え、実はこの時期までこれを書くことを躊躇していたのである。しかし、同様の記述を某有名新聞に見出すに及んで、遂に決心した。）

またもフロイトに御登場願おう。今日の性文化である。実に多種多様のピンク雑誌が氾濫する中で、女性秘部を刻明に描くものが存在しないことは自明であるが、そのことがニヒリズム形成に一役買っているのではないかという事は容易に考えられよう。すなわち、白い裸身を見せて男性の性欲をある程度まで掻き立てこそすれ、肝心のところでストップさせてしまうのは、高まった精力のやり場を喪失させるわけで、人々に幻滅と脱力感を起こさすに決まっている。他にぶつける対象がない以上、高めたからには期待に応えるというシステムが絶対に必要かと思われる。公序良俗に反するという名目での政府指定のタブーは、従って明らかに悪法といえよう。現に欧米ではこの点について自由化してはいるものの、何ら障害をもたらしてはいない。されば愛のコリーダ事件において大島渚氏が言った、「これからの映画は陰部を写さねばならない」という事は実に正鵠を得たものであろう。私自身、陰部の芸術を奨励したい。

エデンの園の植樹状態、香気、そうしたものの個人差が生み出すバラエティはニヒリズムを一気に吹き飛ばすに違いない。今日までの容貌、体型、乳房等の重視より、陰部形態による人体の美的評価、これこそ人間の生態的法則にズバリ的合した新しい文化的所産になるであろう。秘やかに期待したことがかなえられるというシステムは、必ずや万民に生きる喜びを附与するであろうし、些少なる性の羞恥心の撲滅は、一対一の対人関係の深まりにおいて必ずやプラスになろう。また性器の隠蔽こそ、かえって不健全な性道徳を生むと言えるのではあるまいか。ほのかに慕う恋人の性器が自由に見られれば、おのずと恋愛の正攻法も自然に身につくというものである。されば、せめて夏期においてだけでも、全国をヌーディスト村にするのも一策である。欲望をもよおした男性自身が起立し、女性が潤れればそこにはコセコセした恥じらいなど何もなく、相手の思いは一目瞭然である。恥じらいが青臭く、シラケるというのなら、こうした制度こそ、シラケを打破する妙案であると言えよう。出血に苦しむ女性を目のあたりにした男性がソッといたわってやれる社会には、原始的ではあっても、それだけに暖かなコミュニケーションが生まれる。それでなくとも、

――君の〇ンコ素敵だね。

と、男性が女性に言える人類共同体においては、いじけた反社会性、うっそうとしたニヒリズムの存在する余地はまず考えられないのではないだろうか。人間にとって、やる気を起こさせるものは、確かにすべて性に勝るものはないといえよう。

以上、ニヒリズムの由来と、そこから読みとれる改善方針(?)について論を進めてきた。

次にニヒリズムが日常生活にもたらす影響について私なりに分析してみたいと思う。

と言っても表面的な詮索では、商工業の沈滞云々のありふれた予想を禁じえないので、三たびフロイトに御登場願うことにしよう。

まず、肉体的交情側面において影響を受けるのは何といっても男性であろう。日常茶飯事での情熱欠如は、必然的に男性を個体維持もしくは個体伝承の本能へと導くものである。しからば日頃の情念の対象にはいかなるものがあるか、その深部の記述は検閲に触れる虞れがあるのでお許し願いたい。一方、女性は元来受身の側であるから、その精神面にはニヒリズムのいかなる影響も害を示さない。されば「窮極の状態」においては、焦る男性よりも、変化のない女性の方が明らかに上位である。ここに疑いもなく女性上位の社会到来が予見されるのである。とは言え、医学的立場から分析する限り、渡辺淳一の『解剖学的女性論』によれば、女性上位はナンセンスだそうであるから、どうやら両性間の議論が再び激化しそうだという

ことは十分に想像されよう。

以上、随分と勝手な推測をまじえながらもニヒリズムについてあれこれ考えてきた。実に汲めども尽きぬ問題のようである。所々私の趣味に従って、露骨にエロティックな記述もあったようであるが、他の類似雑誌を参考に、公序良俗に反せぬよう細心の注意を払ったつもりである。とは言え、光ある恒河沙にかくの如き真面目でユニークな発想を盛ってはあるが淫らな文章を寄せたことに対し、若干の良心のとがめもないと言えばウソになろ　(54LＩ)

時代錯誤家

先日3年数ヶ月ぶりで代議員大会が成立した。これは大変喜こばしいことである。これを契機に、学生の自治に対する関心が少しでも高まれば、それは素晴らしい事だろう。

筆者も当日代議員大会に出席していて、実を言うと事前から、どうせ何年も成立していないそうだから(当然の事ながら、筆者が入学して以来、初めての代議員大会である)今度もダメだろう。申し訳程度に顔を出して、あとは議場委任して、適当に帰っちまおう、などと不届きな考えをしていたが、行ってみると発行数(採決に必要な代議員証の発行数)が、あと10人くらいという状態。残念ながら、発行を受けても出席しなかった人が少数ながらいたらしく、議事が始まった時には、まだ大会は成立していなかった。こうなっては、適当に帰るなどというわけにいかず、当日の予定は全部キャンセルでてんてこ舞い。この歴史的な(?)大会に最後までつきあった結果、家に帰ったのは深夜2時という有様だった。

ところで大会成立は結構なことだが、最後の会計検査委員の選挙を見ていて、ちょっと納得がいかなかった事がひとつある。それはこの選挙の投票方法についてである。委員は3人選ばれるわけだが、何と3人連記で投票するのだ。いったいどうしてこんな投票方法が採られているのだろう。これでは民主主義的な運営が行われるかどうか、はなはだ疑問である。

今の社会で、大衆的な民主主義を支えている方法の一つが、選挙による代議制なわけだが、その選挙も方法によって、非民主的結果を招来する事は、皆さんよくご存じのことだと思う。その中でも大選挙区全員連記制は、多数意見を全員に押しつけ、少数意見を圧殺する危険性が極めて大きい。例えば100人の人から5人の代表を選ぶ場合、その100人が49人と51人に分かれて対立しているとすると、51人が自分達の代表5名に投票すれば、その5人が全員当選し、反対の49人からは一人も代表が選ばれないという事になってしまう。つまり、過半数いやそれ以下でも、多数意見の代表者のみが選ばれ、少数意見の代表者は、まったく選ばれないという事になってしまう。民主主義は少数意見の尊重の上にこそ初めて成り立つ。とりわけ監査のようにチェックの為の機関は中立ないし批判的立場から行われるべきであるのに、これではお手盛の危険が大きいといわざるを得ないのではないか。

聞く所によると、何と常任委員の選挙をはじめ、自治会の選挙の多くが全員連記制だという。自治会のような全学の声を広く集めその統合を図ってゆくべき機関がこれでは民主主義を守ることはできないと思うがどうか。

自治会執行部は、自らの民主性、正統性を証明する為にも、早急に選挙制度を改正し制限連記制、大選挙区単記制などの制度に現行制度を改善してゆくべきではないだろうか。

【邑】

「モラトリアム人間の時代」における問題点

吉井啓二郎

先日非常に遅ればせながら『モラトリアム人間の時代』（小此木啓吾著・中央公論社）を読んだ。評判通り、面白く読ませてもらい教えられる点も多々あった（特に「日本人の阿闍世コンプレックス」にはそうであった）が、表題作である「モラトリアム人間の時代」に二つほど問題点がみられるので、まったく時事性に欠けるとはいえ、それを指摘しておきたい。

まず第一に、小此木氏の「受験」に対する理解についてである。

小此木氏は「現代人一般の社会的性格として『モラトリアム人間』をとらえるには、現代社会の際立った特徴である（中略）極端なほどの平和主義＝モラトリアム状態＝価値観の多様化と、熾烈な競争社会＝徹底した管理社会体制＝価値観の画一化」という「相反併存」に「目を向けねばならない」とし[1]、その例として受験競争を通過してきた青年達を挙げている。そして後の箇所でも「学歴社会の受験戦争は、受験生たちの相互関係を間接化し、直接お互いにケンカしたり憎み合いながらの友情を味わうゆとりを与えない[2]」（傍点吉井）と主張する。

何という陳腐窮まりない理解であろうか。ステレオタイプの見本とも言うべきである。私の周囲を見ても小・中・高校時代の友人達は各人各様に受験をこなしているし、ましてや、「直接お互いにケンカしたり憎み合いながらの友情を味わうゆとりを与え」られなかった覚えは、少なくとも私には無い。それどころかモラトリアム人間である青年達は、受験に備える自分は仮の姿であり本当の自分は未来に実現されるはずである、と考えながら受験に立ち向っている、というほうが真実に近いように思われる。

小此木氏は、現実を注意深く見ずに、マスコミの作りあげた虚像によって、自らの、受験に対するイメージを決定しているのではないだろうか。

次に第二の問題点である。実はこちらのほうがより重要なのだ。それはモラトリアム人間に対する価値判断についてである。

小此木氏は、「モラトリアム人間の時代」によって、「モラトリアム状態にいていつになってもおとなになれないような心性が、青年だけではなくて年齢的にはすでにおとなと言われている社会人のいろいろな階層に及んで、一つの社会的性格として見られることを論証しようとした[3]」のであって、「具体的な処方箋は、それぞれの局面でそれぞれ考えてほしい、むしろいま大事なことは正確な認識を持つこと[4]」（傍点吉井）であると語る。

しかしこの発言に反して、実際は単なる現状分析にとどまらず、かなりの価値判断が入りこんでいる。小此木氏は、反モラトリアムの動きは民主主義を破壊する、と繰り返し述べ、さらに「モラトリアム構造の破壊を回避しながら、われわれは今後どのような道を歩むべきであろうか[5]」（傍点吉井）と言う。これは価値判断が入っていると言わざるを得ないだろう。その点に関して、土居健郎氏の「もう少し価値判断があったんじゃなかったかな[6]」という指摘は正鵠を射ている。

私は別に、価値判断を述べること自体や、反モラトリアムの動き

は民主主義を破壊する、という意見自体を否定するものではない。それらはむしろ肯定されるべきことであろう。問題は、価値判断を入れておきながら単なる分析とする態度であり、価値判断を入れることによって分析に公平さを欠いてしまい正確な認識でなくなることである(後者の例としてモラトリアム心理と民主主義の関係が挙げられる。確かに反モラトリアムの動きは民主主義の破壊につながるであろう。しかし一方、モラトリアム心理の特徴の一つである"お客さま意識"と民主主義とは相容れないものである。その点の分析・説明が「モラトリアム人間の時代」には極めて少ないように思われる。)「モラトリアム人間の時代」に見られるこういった姿勢は、まさに欺瞞的であると言われてもしかたがないのではないだろうか。

以上、簡単ながら二つの問題点を挙げた。読者の方々が「モラトリアム人間の時代」を読む際に、些かなりとも参考になれば幸いである。

(外Ⅲ L)

〈註記〉

(1)『モラトリアム人間の時代』・三一頁
(2)同右・六三頁
(3)同右・三三二頁
(4)同右・三〇三頁
(5)同右・七四頁
(6)同右・三三二頁

発刊に際して

駒場にたたずみ、ふと思う。自分は一体何なんだろう。何故ここにいるのか。駒場ってどんなところだろう。実はこんなあたり前のことを知らないままに我々一人一人は通りすぎていく時に身を浮かべているのではないだろうか。

「自分が身を置いている場所を直視しよう」ここから恒河沙は出発する。駒場を見つめ、その文化をたとえわずかなものでも、自分自身の基盤として大切にし、ひいては駒場の文化を積極的に形成していこう。これが時代錯誤社に集まった我々の考えである。

もちろん、文化はそこで生活する我々一人一人が支えていくものであり、決して、政治的なアジテーションや、行動によって作り得るものではない。それでいて文化は、それらすべてを包摂し、溶け込ませてしまう総体として存在する。一人一人のささやかな行動、それが実は文化の最大の担い手といえるだろう。

しかし現状を考えると、一部の党派や、大きなサークルを除いて、駒場にいる個人にはコミュニケーションの手段が与えられていない。これでは充実した文化内容は維持出来ないのではないだろうか。恒河沙は駒場の文化を、ひいては、我々の時代の文化を最底辺から支えるものとして、無検閲・無修正を原則としてその誌面を広く公開し、コミュニケーションの中から、新たな文化を建設していきたいと考えている。

(一九七九年一月)

予言について

廣澤和郎

'79年10月19日の朝日新聞夕刊に載った、吉田秀和の「音楽展望」は、全くこっけいな代物であった。中原中也や数多くの芸術家、文学者等々と親交を持ち、およそ文芸と称せられるもの全てに造詣が深いと思われる彼にしてこの体たらく、どのように考えたらよいのだろう。

「音楽展望」の文章は、英国ロイヤル・オペラの来日公演での『ピーター・グライムズ』についての評論として書き始められているが、私はその公演を観ていないので、公演については何もいえない。しかし吉田秀和は感想から発展(?)させて一般論を述べている(実にこれが全体の大部分を占め、主旨となっている。)実はこの一般論にとんでもない誤りがあるのである。

まず彼は、ロイヤル・オペラの『ピーター・グライムズ』を観て感動したことを率直に述べている。このすぐあとに、P・ブレーズの『オペラは死んだ』という有名な論文をひきあいに出し、『ピーター・グライムズ』を例にとって、「どっこいオペラは生きていた」と言う。そして、『ピーター・グライムズ』以外にも、ブレーズの論文が発表された後に、見ごたえのあるオペラが作られていると言い、「オペラは死んだ、オペラには未来がないなどという予言は教条主義的否定以外の何物でもなかったのだ」と断言する。このあと彼は、『ピーター・グライムズ』は、ブレーズの論文発表以前のオペラとは違っていること、自身も「オペラには未来はない」と尻馬にのって言ってきたことを認めてはいるが、結局予言は誤っていたと言うのである。

ここまでの論は、一応もっとものようにも思われるが、予言というものを考えてみると、どうにもうなづけない節がある。

何年か前、『ノストラダムスの大予言』なるものが話題になった。あの時の人々の姿勢は、それについて無関心で「そんなのくだらない」と言う者、「当たっている」と騒ぎ立てる者、この二派に分かれていた。

前者について言えば、ノストラダムスの予言が一種神話めいたディスクールであり、他にもっと考えたり騒いだりすべきことがたくさんある。もし仮にそれが当たっていたとしても、今後のことについても当たるとは限らない。といった判断を下したのである。つまり排除したのである。

一方後者は、とにかく当たったということに固執する。正確な文章は忘れてしまったが「…空より火が舞い降り、…恐怖の魔王が人民を動かし…世界の大部分は火の海と化す…云々。」といった一節があったように記憶する。まさに神話めいた文章であるが、ここで「空より舞い降りる火」を「爆弾」と、「恐怖の魔王」を「ヒトラー」と、等々の解釈を行うと、これは第二次世界大戦に符号し、予言は当たった、と騒ぐのである。

どちらに賛成するかという決定はたやすいが、両者を改めて見直すと、「予言」の構造が浮き彫りにされてくる。

ノストラダムスの予言(これは予言としての予言であり、下らないものであるが)をみてもわかるように、予言というものは何らかの形で記録されたディスクールである。そして重要なことに、あとになって幾通りにも解釈されるという性質(構造)を持っている。

この点において、予言は予想、予報の類と明確に区別されねばならない。

先にあげた「音楽展望」の中で吉田秀和はさらに、「予言、予報のたぐいにやたらあやまりが多いのはなぜだろうか。」と言い、「予言がはずれたのは、あとからなら説明できるものが、予言の時点では見逃されていたということになる。」と攻撃する。

吉田秀和の文章は、私のみるところ、彼の意図にはずれた解釈をほとんどし難いのであるが、一方ブレーズのあの論文は違っている。

吉田秀和も認めているように、『ピーター・グライムズ』がそれまでのオペラとは異なっているとすれば、それはブレーズの言った「オペラ」のカテゴリーからはずれるという解釈も充分成立するし、「死んだ」という言葉も「復活」を期待してのものと解釈するのも可能であろう。要するに吉田秀和には、予言の持つ「幾通りにも解釈される」性質がまるで見えていないのである。例えば天気予報とか競馬の予想とかいったものは、ほとんど一通りの解釈しか許さない。解釈が幾通りも可能である予言というものがまるでわかっていない彼なればこそ、

「予言、予報のたぐいに」

と混同することができ、なおも予言が何故はずれるのかということを、全文の約半分をさいてまで、しごくあたりまえに考えることができたのである。

前にも言ったように、ブレーズの論文（作品）は、予言の構造、即ち「あとになって幾通りにも解釈される」構造を持っているのであるから、吉田秀和のように解釈すれば確かに予言ははずれたことになる。しかし、別の解釈（たとえそれがブレーズの意図に反していようと）をすれば当たるのである。予言というのはそのようなものである。

それ故言葉を換えれば、はずれたのは「ブレーズの論文に対する吉田秀和の解釈」なのであり、これをもってあの論文を否定することは絶対にできない。吉田秀和は、ブレーズの論文を盾にして自己流の解釈をいいふらして悦に入っていた自分をまず率直に反省すべきであるが、彼がやっているのは卑劣きわまりない自己嫌悪であり、それをブレーズの論文になすりつけているのである。明治時代の征韓論や、敗戦直後進駐軍の兵士に体を売ったパンパンに向けられた、多くの日本人の憎悪、などにも見られる、卑劣な自己嫌悪のなすりつけと全く同じ図が、吉田秀和の文章には見られる。ここまでくると、こっけいであると同時に醜悪でさえある。

さらに吉田秀和は続ける。

「フランスの詩人ポール・ヴァレリーはかって、詩には完成ということはない。いわゆる完成とは問題を最後まで解決する努力を中途で打ちきった結果にほかならない　という趣旨のことをいったが、これは詩作についての真実にとどまらないのではなかろうか。」

「現実はいつも流動してやまず、何の問題の解決も知らず、証明にも無関心なのだ。」

これらの指摘はおそらく正しい。

しかしながら、「予言の構造」「予言と予報、予想の類との差異」が、まるで見えてない彼は、さらにこう言う、

「それにひきかえ、予言はこの現実を一時点に停止させた上で、白か黒か、勝ちか負けかをわりきろうとする。」

予言というものは、それを為す意図においては、彼の言うような「わりきろうとする」姿勢があるにはあるが、いったん「ディスクール」また「作品」として定着されると即ち、予言になると、幾通りもの解釈を許すようになる。つまり、「わりきろうとする」姿勢が稀薄になり、一概にわりきれるものではなくなるのだ。彼の言うような「わりきろうとする」ディスクールは、予言ではなく、むしろ予想、予報の類なのである。

このような混同をみると、吉田秀和はポール・ヴァレリーの言葉

を、ほとんどわかっていない、と考えざるを得ないようである。そのためヴァレリーの言葉は全く意味をなさなくなり、吉田秀和の文章のこっけいさばかりが目についてしまう。さらに言うなら、彼があげたヴァレリーの言葉自体、実は予言であるのだ。

吉田秀和はこのような全く愚かな混同を自覚せずになおも論をすすめ、次のように結論づける。

「予言そのものは芸術のやっていることとは対立する行為であることははっきりした」

この文章の中の「予言」という言葉を「予想」とか「予報」とかに換えれば、正しい指摘となるであろう。彼はなおも両者を混同しているため、結局は誤りであるこの文章がかける。

この文章の誤りをはっきりさせるため、少し芸術というものについて考えてみよう。

例えば小説というものは、書かれた後に数多くの人々が読み、読者が幾通りにも解釈する。これと同様のことが他の全ての芸術についてもいえるし、それは明白な事実である。

しかも、解釈の多様性が、芸術作品の良し悪しを測る、おそらくは最も重要な尺度の1つになっているのだ。そして吉田秀和が専門としている音楽などは、楽譜が予言としての構造を持った「作品」であるからこそ、どんな時代でもどんな国でも演奏（＝楽譜に対する解釈を音にすること）され、人々に鑑賞され、芸術として存在し得るのである。

以上のことからいって、芸術には幾通りにも解釈される構造、即ち予言の構造が事実として存在するのである。芸術のやっていることと予言そのものとが、はっきりと対立しているはずはない。

繰り返して言うが、吉田秀和は予言を予想・予報の類と、終始一貫混同している。この故に、「音楽展望」の文章はくだらない、こっけいなものとなっている。

そして、さらに致命的なことには、しめくくりとして最後の一文をこう書いている。

「少なくとも芸術に関しては、予言はすべきではないのだ」

これこそまさに、「教条主義的否定以外の何物でもない」のである。

付記

吉田秀和氏の文章を無断で引用したことを、まず、氏及び朝日新聞社にお詫びしなければなるまい。ここではっきりとお詫び申しあげる。

吉田氏の文章については、できる限り正確に引用したつもりであるが、ノストラダムスの大予言については、手元に資料がなく、私の貧しい記憶力に頼って書いたため、とんでもない間違いがあるかもしれない。ここで御容赦を乞う次第である。

しかし、引用した文に仮に間違いがあったとしても、この論における私の考えは一向にかわらない。

広告
東京都台東区鳥越1－9－4
有限会社 ギンショ
TEL. 866・2966
Quick Print
年賀状の印刷をおうけします

新幹線車内販売体験記その2

夢野沙理華

〈台風で遅れる〉

二往復も乗務すると、仕事の内容はほぼのみこめて、次に何をすべきかも判断がつくようになる。そうすると、仕事の単調さがだんだんやりきれなくなり、あと何日働けばよいのかと指を折る回数が自ら多くなる。飽きると車窓からの風景を楽しんだ。晴れている時に見える海はすばらしい。熱海付近と、広島に近くなってからと、見えるのだが、海なし県に育った私は、あの美しい碧瑠瑠と、のびやかな水平線に、人一倍魅せられてしまう。地方ごとに変わってゆく屋根の色や形を眺めるのもまたおもしろい。浜名湖の夕景や、朝焼けの指揮川も格別だ。

三往復目の下りの時は、台風16号の影響で、時折突風もまじえる雨が降っていた。新幹線は、大雨や地震等で遅れることがよくあると聞いたが、案の定、翌日の十月一日には最初の便から大幅に遅れてしまった。六時五十一分発に乗るために、五時半に起床したのに、運転再開がいつになるかはっきりしないので、また寝よとの指示。ニュースでは東京地方の川のような道路が映されていた。晴れた空を見上げては、ぼやくことしきり。結局十時すぎに、他の班の列車に便乗することになる。仕事をしなくて済むのだが、座る場所がなく、倉庫のような所に窮屈な思いをしてはいっていなくてはならないのには閉口した。雑誌をみたり、雑談をしたり、眠ったりしていた。新幹線は、通路や、車両間まで乗客であふれ、人いきれと、台風通過後の蒸し暑さで、夏のラッシュ時のようだった。新大阪で、客を乗せない回送列車にのりかえたが、普段立ち仕事をしている皆は、それだけでも満足そうだった。遅れた分だけ割増手当がつくという。こんな楽をして余分にお金をもらえるなら、いつも遅れればいいのに、などと誰かが言っていた。

富士が初めて頂上まで見えた。裾野のなだらかな広がりはやはり美しい。山頂に観測所がみえる。東京に近くなると、空の色がはっきり鈍くなる。それまで青く澄みきった空を見てきたせいか、数多く立つ煙突が忌まわしく思われた。

〈初めての給料〉

一か月単位で編成されている乗務行程には、二日連続の日帰り航路がある。こだま号で新大阪までを往復するのだ。こだまは食堂車がないため、普段の半分の人数で乗務する。車内販売も、一両から十六両まで歩き通さねばならない。でも、一緒に組んだ人が優しかったので、仕事が楽に感じられた。この種の仕事では、精神的要素が大きなウエイトを占めるようだ。同じ列車に帰りも乗務する場合は、引き継ぎをしないため、荷物のあげおろしがなく、終点近くなっても余裕がある。客が殆んど乗っていなかったので、ビュフェの椅子に腰かけて本が読めた。（こんなことは、後にも先にもこれ一回きりである。）景色も堂々とじっくり眺められた。暖かい陽差しを浴びて、なんだかとても平和な気持ちになり、知らぬ間に居眠りしていた。

品川営業所に着いて、初めての給料をもらう。六日分で二万六千

四百円だ。私が労働して他人からもらった初めてのお金だ。嬉しくて、大事に下宿にもって帰った。

〈カープ優勝の日〉

十月六日は、十八時発広島行のひかりに乗った。黄昏時に東京駅を出るのは、いつもと雰囲気が違っているせいか、やや興奮するものだ。出発の時からネオンが輝いているのだから。この便は、丁度夕食時に当たるため忙しい。食堂はずっと満席ランプがつきっ放しだ。お酒を飲んでいるお客さんが、景気よく買ってくれるので、お土産を売る私も休みなく駆けまわらなければならない。代金の取扱い方や、お客との対応のしかたなども慣れてきて、自然に言葉が出るようになっている。不思議なもので、神経を緊張させたまま駆け回っていた方が、目を盗んで中途半端に休んでいるよりも、疲れを感じない。珍しく、一つ二つと売り切れの品が出てくると、全ての品を売り切ってみたくなる。この日は、お土産品の殆んどを売り尽くし、気分がよかった。

乗客の中に、数人、熱心にラジオを聞いている人たちがいた。広島が優勝を決めようという一戦に耳を傾けているのだ。中年のおばさんから、「広島は勝ちましたか？」と尋ねられたが、答えられるはずがない。野球の好きな私の方こそ、仕事など放り出して聞きたいくらいだ。

広島には、二十三時四十一分に到着。誰からともなくカープ優勝の情報が流れていた。既に町の興奮は醒めていたが、広島テレビは十二時過ぎまで、コマーシャルごとに〃カープ優勝〃の赤文字を出していたし、聞くところによると、午前三時まで無料で飲み放題という酒場も多かったそうだ。翌朝の広島駅には、カープV2の垂れ幕が鮮やかに下がっていた。駅ビルには、赤ヘルケーキも売り出されている。

七日は総選挙だったが、生憎の雨で投票率は下がるだろうと思いながら、下宿で選挙速報を聞いていた。

〈修学旅行の生徒たち〉

時節柄、修学旅行の団体が多かった。まだあどけなさの残る顔を見て、自分と僅かしか年齢差がないのに、私にもあんな頃があったのだなあ、と妙に大人ぶった気分になった。彼らはお金をそれ程もっていないので、あまり買ってくれない。アイスクリームがせいぜいで、それも、二百円という値を聞くと、「高い！」といって買うのをよす者が多い。（確かに高いのだが……。）これから目的地へ向かう団体は、財布の紐はかたく、かといって帰る団体でも、疲れきって、全身の筋肉を弛緩させて眠っている生徒が多いところは、売れるはずがない。ただ、一人が買うと、必ず数人が同じ物を買ってはくれるが……。車内では皆、カセットでロックやフォークを聞いたり、トランプをしたりして楽しそうだった。年齢が近いせいか、何度も、売れない土産品をもって通るのが、非常に恥ずかしかった。仕事やむを得ず同じことを繰り返して言っているのに、「ワンパターン！」などという冷やかしの声を、背中の後ろで聞くと、その場を逃げ出したい気分になった。顔が赤くなってゆくのがわかった。仕事だと割りきれば済むことだと何度も言いきかせた。でも、思ったよりも素直な生徒が多く、救われた気分になった。

偶然にも、母校の修学旅行と同じ日に広島へ泊ることになり、高校時代お世話になった先生と会うことができた。先生は、さすがに驚いた様子だったが、社会勉強も大切だと言ってくださった。親密感のある対話から久しく遠ざかっていたことと、遠い広島での再会ということとで、一層感慨深く、乾いていた心が潤う思いだった。アルバイトの難しさ、大学生活のこと、高校時代の思い出など、時の経つのも忘れて話した。

〈仕事と人間〉

ある人は、この職場にきて性格がきつくなったと言っていた。私がはいった班は、噂によるとワースト5に数えられる班だから特別かもしれないが、性格がかわるのも尤もだと思った。短時間に荒々

しく行われる積荷作業、立ち通しの仕事、時間・空間的拘束、些細な事にまで及ぶ上の人からの注意等々……。これらを乗り越えて、いわゆる〝強く〟この職場で生き抜くためには、知らないうちに語気が強くなるくらいは止むを得ないことかもしれない。もちろん、そうでない人も多数いるが……。萎縮し続けていては到底つとまらない。私も、疲れていなくても逆らって目を盗んで休むというスリルを楽しんだりしたが、素直さを失ってはいけない、と絶えず自分に言いきかせてきた。彼らは些細なことで短絡的に怒り過ぎる、(男の人も女の人も)と常に感じていた。もう少しお互いが寛容であったならば、仕事もしやすくなるのにと思っていた。ある晩、二級さんが、一級さんの態度について不満を訴えていたが、話し終わってから彼女が、自分も厭な思いをしたくないから、他人に対してもその人の立場を考えてこれからは応対するようにしようと言った。それからは、彼女の態度は幾分柔らかくなり、強く注意した後で慌てて「ごめんね。」とまで言ってくれるようになった。広い目で見たら、ものすごく些細なことなのだ。でも、このような職場で働く者にとっては、一人の人間の一つの言葉が、行動が、態度が、それを受けとる人間にとって、いちいち身体の髄まで、非常な重みをもって突き刺さってくるのだ。論理とか理性とか、そういうものより、その場その場で、感性に直接訴えかけてくるものが、彼らの生活を回転させている。だから、二級さんの態度の変化というものは、私にとって、ある種の感動だった。このような覚醒が一人でも多くの人に起こって、若い素直な人格を歪めることのないような、明るい職場になれば、と私は思った。

就寝前の僅かな時間を見つけて、辻邦生の「モンマルトル日記」を読んだ。そうしていると、自分の置かれている、あるいは自分をとりまく状況が、ものすごく卑小なものに感じられ、その一つ一つに腹をたてたり悲しんだりしている自分が莫迦らしく思えてきた。だが、どんな卑猥なことでも、その時は真剣にそれに対処しようとしているのだ。辻邦生は、一瞬間に現われる「生のすばらしさ」の強烈な閃きを、自己に定着させることに全精力を傾注しているが、たとえ次元は違っても、瞬時を真剣に生きようとしていることでは変わりない——などと、わかったようなわからないような言いわけを考えて、気休めとした。

〈広島での最後の日〉

新大阪と岡山で一泊ずつした他は、全て広島に泊ったので、広島の町には何となく愛着を感じる。新幹線乗り場の出入り口側は、繁華街ではないので静かだが、正面に屹立している仏舎利塔は印象的だ。おわんを逆さにしたその上に、細長い円錐を付けたような、銀色の塔は、夜になると不気味にぼうっと輝く。広島での最後の日は、十五時四分着で自由時間が多くあるので、皆、思い思いに楽しんだようだ。チーフさんたちは宮島まで釣りに出かけ、二、三人の女の子は平和公園に行くという。パチンコで時間をつぶす人もいる。私は修学旅行で、宮島にも平和公園にも行ったので、他の二人と一緒に仏舎利塔まで登ることにした。登るには手ごろの高さなようだ。意外にあっさり登りきってしまった。

丁度いい時期だった。紅葉にはまだちょっと早いが、秋という澄んだ季節も、そして、夕暮れ前という時間も。頂上からは、広島の町が一望のもとに見おろせる。すばらしい。なんと清々しい気分だろうと思った。遠方には、瀬戸内海が見渡せ、海上には、島々が、霞光の中に、その低い翠屏を現わしていた。西方に目を転じると、夕陽が美しく水面に照らしだされていた。太田川が内海に注いでいる。港には一隻の大型船が停泊している。思いのほか静かだ。自動車の、のろのろした動きだけが見える。時間が、非常にゆっくり経過していくように感じられる。こんな平和な町が、原爆の被災地だったのだろうか。そんなことも、ふと考えていた。

「イモ虫って本当に長いなあ。」と、食堂車のウエイターさんが言った。(新幹線のことを形容して、イモ虫と言うそうだ。)長いマッ

千箱のような広島駅から、東京へ向かってゆっくり発車したところだった。私も彼と同様に、新幹線に対し一種の愛着さえ感じるようになっていた。「きょう晴れてよかった。」と、私は誰に対するともなく言った。

坂道を下る時、キンモクセイの芳香に思わず立ち止まってしまった。台風でも散らなかったのだ。私は大好きな花がまだ残っていたことがとても嬉しかった。

〈エピローグ〉

翌朝は四時半に起床し、真っ暗な中を皓々と照る月を見上げながら広島駅まで歩いた。この、六時三分発東京行、ひかり百二十号で私の勤務が終わると思うと、新たに気分が引き締まった。ミスをしないように精一杯最後の仕事をやろうと思った。途中、地震のため西明石で二時間半も停車し、緊張感が弛んでしまったが、昼食時をはさんで弁当がよく売れ、最高の売り上げを記録した。確か、目標額を三十五万円余上回り、突破金として、班員が各人八百円ずつもらった。突破金は、目標額を上回る金額によって、百円単位で定められており、五百円もらうためには、かなり一生懸命働かなければならない。だから、この制度も、販売意欲向上にはあまり役立っていないように思われる。いくら働いても、乗客の数と購買意欲がなければ売り上げは伸ばせないということも確かであるし。

営業所についてから、皆に「いろいろお世話になりました。」と挨拶したら、「何度も怒っちゃったけどごめんね。また休みにはバイトに来てよ。」と、一級さんに言われた。来ようという気持ちはおこらなかったが、最後になってそういわれると、やはり嬉しかった。彼女たちだって本当は優しいのだ。たとえ、その優しさが、その時限りのものであったとしても、一向に構わなかった。彼女たちの目には、もう仕事をしないで済むことになった私に対する羨ましさのようなものが浮かんでいた。唯一人、心を許し合えたKさんとは握手した。彼女は今年はいったばかりで、何かと辛い目にあってきて、アルバイトの私に対して何かと心遣いを示してくれた人だ。お互い下の者同士ということで親近感を覚え、仏舎利塔に登った時も一緒だった。会社や、上の人たちに不満をもっていて、来年の六月のボーナスをもらったらやめるといっていた彼女は、「きょうで終わりなんて羨ましいねえ。」と言った。そして、「ありがとう、バイトさん。」とも言った。社員ではない私に対し、他の人には打ち明けられない本音や憤懣をはきだし、また、社員以外の人間と少しでも心を通いあわせることができて嬉しかったのかもしれない。私も、厭な気分のままでなく、笑顔で仕事をおえることができて、本当によかったと思う。

私は、三週間のアルバイトを通じ、様々な事を学び、感じ、考えた。自分の感情を顔や態度に表わさず、お客さんに接することの難しさ、手際よく仕事を片付けることの難しさ（不器用な私にとっては特に辛かった。）、そして対人関係の難しさ、立ち仕事の辛さ等々。さらに、外人客相手に試してみて痛感した英会話力の貧弱さ。時間厳守は当然だから、それに対しても非常に神経を使った。自分勝手な解釈とか、自己中心的な甘さなど論外である職場の厳しさ。これらは皆、学生生活の中だけにどっぷりつかり、いわゆる気ままに楽な生活を送り、世間を時としてわかったような口調で論じていた今までの私が味わったことのないものばかりだった。ある人が冗談まじりに「学生なんてなまいきだ。」といっていた。羨望も勿論ある。だが、自立して生きているんだという自負心があることも確かだ。また、もう少し合理的に仕事をしてもいいのではないかと感じることも多かった。例えば、何度も同じ品を販売に行かせて休ませないようにすること。上からの指示が、同じ仕事に対しても人により異なること。（社内一律のマニュアルの徹底を図ればよいのに、と思った）等々だ。そして、このように身心のエネルギーを消費する仕事にしては賃金が低いことや、社員教育の不足も感じた。だが、人

生経験として一番プラスになると思われたのは、単純なことかもしれないが、辛い状況に於ても、相手の良い面を見出そうとする寛容を身につけることの尊さがわかったことだ。人間は、自分が辛い立場に立たされると、他人の悪い面ばかり見つけようとして、余計にみじめな気持ちになり、袋小路に陥り易い。私も三週間で随分そういう場面に遇ったし、自分もそういう状態に陥ってしまったことも少なからずあった。そのような時こそ、良い面を見出そうと努力すべきだ。こんなことをいうと、「ケッ」といって嘲笑する人も多いだろう。しかし、私が三週間のアルバイトで一番考えさせられたことは、これなのだ。

アルバイトを始めた頃は、まだ幾分青さの残っていた稲も、終わる頃には黄金色となり、殆んど稲刈りが済んでしまった。山の木々も紅葉の兆しを見せ始め、もう秋酣わだ。僅かではあるが、東海道の景色の移り変わりも楽しめたし、やはりこのアルバイトをして有意義だった。もう二度とこの仕事をすることはないであろうが。

きょうも、東京駅の地下街では、制服を着た彼女たちが、入線前の僅かな時間を利用して、ささやかなショッピングを楽しんでいるはずである。

(外LⅢ)

広告

小道具，衣裳，
舞台足場 e.t.c.
貸出致します。
又、劇場用仕込み
承ります。

劇団 夢の遊眠社

詳細
事務所
(485) 4798
又は北寮2B

奇怪クロスワード No 7 こたえ

ヤ	ス	ダ	コ	ウ	ド	ウ	■	カ	リ
リ	カ	■	カ	シ	ン	■	カ	ラ	シ
ガ	イ	カ	イ	■	ラ	ン	ド	ク	■
タ	■	ラ	ン	ラ	ン	■	ウ	リ	コ
ケ	イ	ク	■	ク	■	キ	リ	■	ウ
■	ク	サ	レ	エ	ン	■	ツ	ウ	カ
エ	サ	■	エ	ン	■	カ	■	コ	ガ
ノ	■	オ	ニ	■	タ	モ	ウ	サ	ク
ケ	イ	サ	ン	ヨ	ウ	シ	■	ベ	■
ン	■	ン	■	リ	ン	カ	ー	ン	■

今回は、易しく、大衆向に
作成したため、多数の回答
を期待したが、9名とまず
まずの成績をおさめた。
今後とも、この調子で頑張る
ように。
── 時錯社社長 K

正解8名、当選者下のとおり
1等 友安昌幸さま
2等 堂前雅史さま
3等 小林徹，関野勝弘，恩智理
和泉浩二郎，土肥啓介，のみなさま

ご応募有難うございました。
今後ともよろしく。一社員一同

書評　暮しの手帖

今さら紹介するまでもない雑誌だが、主婦が読めばいい本、という偏見をもっている人も多いと思い、あえて紹介する。私達の身辺をもう一度じっくり見直そうと思う人には最適の手引きとなるだろうし、実生活に役立つ事柄や、見落としがちな盲点を、これほど広範囲に、かつ、それをコンパクトに収めた本は、他に類をみないのではないだろうか。それに、消費者の側に立って、良心的で客観的な評価をしている商品テストは、昔から有名である。雑誌につきものの広告がなく、編集に際し、偏った考え方を努めて避けようとしているので、素直に読んでゆけるのも大きな特徴である。

九・十月号の内容は次の様になっている。まず、「この中のどれか一つ二つは　すぐ今日あなたの暮しに役立ち　せめてどれかもう一つ二つは　すぐには役立たないように見えてもやがてこころの底ふかく沈んで　いつかあなたの暮し方を変えてしまう」という、花森安治氏の言葉ではじまる。その後、応急手当の仕方、全自動洗濯機をテストする、ニューヨークの人形の家、料理メモ、ティシュペーパーをアメリカ人より使う私たち、拭けない窓、読者の声、ヴィヴァルディの四季39種をききくらべる、すてきなあなたに、海外旅行記、テレビ註文帳、と続く。その他、夜間中学へ通う母親の記事や、映画時評、〈女性〉を売り物にするな、等の内容がもりこまれている。

この中で、興味深い記事の内容をいくつか紹介してみよう。まず商品テストから。全自動洗濯機については、二槽式との違いを、各メーカー自選の六種に絞って調べている。そして、表示の量は洗えないことや、洗いムラがひどいこと、脱水には時間がかかるし音もうるさい等の難点をあげ、洗たく中そばについていなくてすむ点を除けば、全自動の方がよいという点は殆んどなかったと判定している。「割れない」ことが売り物の携帯用マホーびんに関しては、次のような結果を出している。「このアクト・ステンレスポットをお勧めするわけにはいきません。割れないけれども、保温力の弱さにがっかりさせられます。本当に残念です。もう一歩の改善を願います。」

省資源の問題に関連させて、ティッシュペーパーの記事が載っていた。もともと「顔用の薄紙」として売り出されたこの紙は、再生紙ではなく、直接木から作るので、日本だけでも一年に四百万本の立木がティシュに使われたという。ティシュなしの生活を一週間したら、やはり「不便」だったが、日常生活に支障をきたすほどのものであるかどうかは疑問だし、便利さとは「何もしないでいいこと」即ち「捨てればいい」ことにすぎない、と述べられている。ちり紙は風でとぶのを押えねばならず、ふきんは洗わなければならない。これに腹がたつというのが「不便」の正体である。

意外に知られていない事もある。マクドナルドのコーヒーに付くシュガーは、アメリカでは5gなのに日本では8gで、普通の料理では薄味の関西も、コーヒーのシュガーに関しては、関東の13倍程多くの量を使っていることとか、赤い羽根は、関西の農家の二百人程のおばさんたちが、一手にひきうけてやっているが、割にあわない手仕事なので後継者難であることなどである。

以上のように、内容はごく身近なことが殆んどで、記事の書き方も、平易、明瞭を心がけて作られている。そして読後には必ず、ささやかな心づかいのつみ重ねで、精神的に豊かな暮らしができ、合理的な生活態度は身につけるべきだ、と感じてしまうはずだ。かたい書物を読んだ後に眺めてみてもいいと思う。【佳】

定価　560円　年6回発行　暮しの手帖社

書評「日本語と女」

いわゆる「女性問題」について書かれた本は多い。それだけみずからを見つめ、生き方を考える女性が多くなったため、と解すべきであろう。けれども、彼女らの期待に応えることのできる質を、それらすべてが備えているかは疑わしい。そして、その期待そのものが、「彼をトリコにするには」とか何とか十年一日の如くさえずっている女性週刊誌程度の質しか備えていないことも応々にしてあるようだ。（「翔んでる女」などはその程度ではなかったか？）

しかし、とにかく、「女性問題」は真面目に受けとめる価値のある問題である。女性にとっては言うに及ばず、男性にとってもそれは看過できまい。何故なら、「人間の人間にたいする直接的で自然で必然的な関係は男と女の関係である」（マルクス「経哲手稿」）からだ。複雑な様相を示しながらも社会における優者と劣者として男女が出会う限り、その間に、疎外なき関係―いわば「親交（コイノニア）」―を結ぶことは不可能である。男女双方にとって、それは不幸と言えよう。

このような問題意識を踏まえ、寿岳章子著「日本語と女」（岩波新書）を今回取りあげることにした次第である。

社会のありようは、そこで流通することばにおのずから反映され、またことばが、社会生活を営む人々の意識を規定していく。このようなことばの性格は、常識の枠内においても理解できよう。

とすれば、この社会で女性がどういう役割を引き受けさせられているか、またかような役割＝〈過去〉としての〈現在〉を乗り超える自由な生き方を女性がいかに獲得してゆくか、を言語生活に視点を置いて考えるのは、有効な筈である。

国語学者である寿岳氏が、そういう視座を持って、自分の問題としての「女性問題」を、具体的に論じたのが本書である。あくまで具体的に、日常の場面から筆を起こしている（週刊誌、歌の文句など）ので、楽しく飽きずに読めるのが特色だ。反面、シモン＝ド＝ボーヴォワールが試みたような、いわば哲学的次元からの考察を欠くので、前半部分を読んで感じられる、社会の押しつける「女らしさ」への著者の憤激は、「中年女のうさ晴らし」に見えて仕方がなかった。

しかし、本書の圧巻は後半の、部落に水道をひくために先頭に立って闘った農村婦人グループのことを記した部分である。

『牝鶏時を告ぐれば国滅ぶ』と言われ、また「たとえ頭からおしっこをかけられてもあたたこうございますと言え」と忍従を強いられる農村女性が、「かなんことはかなんと言おう」と立ち上がったとき、どのようなことが起こったか。夫との激しい衝突、「アカ」攻撃!!。けれども、最後には夫に「わしゃやっぱりお前と一生いくわ」と認められ、本当の夫婦になれた、と感じ、また生活に根づいた要求を実現できたことによって、女として生きる喜びを感じる。

著者はここで、社会から押しつけられたものとして厳しく弾劾した「女らしさ」を肯定的なニュアンスを込めて、彼女達に与えている。「中年女のうさ晴らし」など全く不当な評価であった訳だ。そしてこの農村婦人グループの話は一例にすぎないが、それでも、女性が社会に与えられた「女らしさ」の鎖を断ち切り、自由に自己実現することが、男女双方にとって望ましいのが実感できる。

批判を一言述べるなら、本書は問題視角において極めてユニークではあるが、何とはなしにゴッタ煮的で、「女性問題」の本としてはやや内容の薄さは否めない。とは言え、農村婦人グループの話は印象深いし、何と言っても、楽しい本なので、広く勧めたい一冊である。尚、蛇足をおそれず、あえて言えば、値段は三百二十円である。生協で買えば二百九十円であると思う。（フザケ過ぎ？）

【鯉】

『恒河沙』に寄せられた
読者からの熱い反響―編集部

「駒場唯一のコミュニティ・マガジンを僭称する『恒河沙』（つまり本誌なのであるが）では、先号において、読者アンケートを実施した。

コミュニティ・マガジンと言い乍ら、この広漠たる駒場の地において、コミュニケーションのメディアたることは、それ程容易ではない。ともすれば、一方通行となりがちで、また閉鎖的な同人誌的になる危険を常に孕んでいるといってよい。

これでは、僭称が謙譲ではなくなってしまう。『恒河沙』は張り子の虎である」という全学の大合唱にも抗すべきすべはもはやないのだ。「まずい!!」『恒河沙』の発行母体たる時代錯誤社の社員たちは、このような事態の進展を怖れ、そのステイタスを死守すべく、読者との交流に乗り出すことを決意した。

前記の読者アンケートは、以上のような経緯を経て実施された訳であるが、その結果はいかなるものであったか。主として前号の記事に対する反響を知ることができたと言えるが、少しそのさわりを紹介することにする。（尚、本稿を読むにあたっては、前号をも読むべきであるので、未見の方は当社街頭販売員に申し出て頂きたい。）

まず、ひと際目立ったのは、「新幹線車内販売体験記」に対する熱狂的な反応である。

『新幹線…』はとてもおもしろかった。『インテリゲンチャが無知な労働者、農民を導く』というなーんてことが全くの大ウソであるということはこれを読んでも明らか。」

（O氏）

『新幹線車内販売体験記』は群を抜く説得力があり、他の「文章が、全くかすんで見えなくなりました。観念論でない体験記という企画は、できれば続けて頂きたいと思います。」

（N氏）

恣意的に煽情的な評を掲げたかに見えるかもしれぬが、すべてこの調子なのである。（すべてと言っても、これだけだが）ともかく編集部の方針としては、N氏と同様、体験記中心で行きたいと思っている。乞う御期待!!（当方としては読者の投稿を期待!!）

また、『女子大生という言葉にあなたは何を感じるか』もかなりの反響があった。東大の女の子の特集を含む5号が爆発的な(?)売れ行きを示して以来、「女性問題」は『恒河沙』の伝家の宝刀であるが、今後も一層頑強に抜き続けて、屋台骨を維持することを編集部では狙っている。

他に記事の関係では、チェリーVSハイライトで泥試合を演じ、「ジァイアントロボ問題」を取りあげた激突討論に対する熱狂的支持、毎度お馴染み、編集後記―亜紀子シリーズへの讃辞(?)等が目についた。

最後に、編集部に対する言葉を紹介することにしよう。

「貴誌の女性陣は仲々優秀と思いますよ。しょーとしょーと、『時代錯誤家』の作者等、80年代の女はこうでなくてはね。」

（S氏）

「奥さんに逃げられる程の低賃銀の割にはK社長以下頑張っていると思います。」

（W氏）

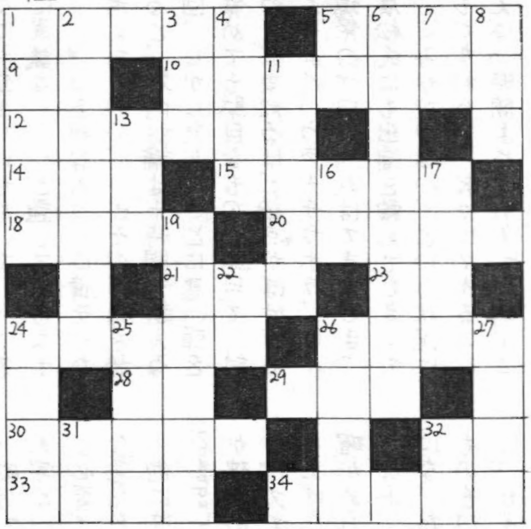
今回は熱い反響と思い込みたい編集部の心情を反映して、一見熱い反響があったかのように記したが、実際は、「ぬるい」という程度であった。今後も、私たちは読者と真剣な交流をはかって行きたい。これが、その一里塚となり得るかどうか分からないが、経営危機のわが時錯社にあって、首斬りの恐怖にさらされる自分のためにも、頑張るぞー!!【鯉】

解答はP.53の解答用紙に書いて、下記あてに12/4までにお送り下さい。

3等 恒河沙9号（5名様）

2等 パーカーボールペン（1名様）

奇怪 クロスワードパズル



1等 高級ポケットサイズコンピューター（1名様）

正解者の中から抽選で7名様に豪華賞品が当る。

Down たて

1 毎度おなじみ
2 赤・左
3 黄金の日々
4 ギンショウ
5 床店
6 ペイパームーン
7 最低7つ
8 小笠原流
※13 メナムのとなり
16 ヤミ米を買わないと‥‥
17 義理と人情
19 今週のベストテン
22 きくけ
24 アンカレジ
25 ねてるゼブラ
26 地中海
27 いつかは読みます
31 桜田門の変
32 5ヨ入
※11 バリカン

Across よこ

1 第30回
5 I look at me.
9 買う
10 国民総背番号
12 東落評（7号参照）
14 坂の街
15 信濃川などの流域付近に多い地方病
18 ジュリアン・ソレル
20 全国で10番目に長い川
21 虫の知らせ
23 レバ
24 宇崎竜童
26 ひそひそ
28 クオキ
29 アスワン・ハイダム
30 クォーツ
32 龍角散
33 オープニング
34 バリケード封鎖

〒176 練馬区練馬4-1-18 小山方 時代錯誤社

編集後記

来るな来るなと思っていた駒場祭も、無情な時間の流れに押し流されて、目前に迫ってしまった。我が社では、恒河沙の編集・発行・販売といった日常活動の延長として、駒場祭の場をかりて、我々自身の姿を自覚的に捉え、今後の展望を探るために、本学教官廣松渉氏を含む多くの人々にお集まりいただいて、『「若者論」に異議なし?』と題して自由なディスカッションを行なおう、と偉そうなことを考えたものの、いざその準備を始めてみると、社内討論は十時間を越えること数回、しかし悲しいことに悪い頭をいくつ集めても駄目なものは駄目で、討論を重ねれば重ねるほど論点がぼけ、もうやめようよという声もチラホラ。しかし、駒場祭のプログラムはできてしまったし、廣松氏にも出演を頼んでしまったから引っこみがつかない、という状況にあるにもかかわらず、我々にできることはと言えば「時間よとまれ!」と叫ぶことだけ。とは言えそれではヤバイので、約一名に責任を転嫁して、駒場祭におけるディスカッションへの問題提起となるべき文章を書かせることにし、その結果できあがったのが今号の巻頭の「ドッポに救いはあるか」である。読者諸兄に、是非ともこれを読み、積極的にディスカッションに参加されることを訴えたい。

なお、このディスカッションの記録は来号(12月10日発行予定)に掲載するつもりであるので、御期待願いたい。

ところで、編集部の怠慢のため前号ではオヤスミにした「今、再び東大を問う」は、何とか継続できる見通しとなった。「処分」が大きく問題化している現在、大学というものを根本的に問い直すことが必要であろう。この問題に関する素朴な意見をお寄せいただければ幸いである。

他に注目すべき原稿としては、「Discover Komaba」があげられよう。これは編集部が独自の調査網を駆使して、駒場のキャンパスで目につきにくい意外なものを取り上げたものである。実際に自分の目で確かめられてはどうだろう。

なお、私事で恐縮であるが、先日一歳になったばかりの息子が初めて言葉なるものを口にした。仕事に疲れて帰宅し、ジャガイモの煮っころがしを作っていると、なんと耳慣れない声が「アキコ」と叫ぶではないか。あの逃げた女房の亜紀子のことである。息子の前で奴の名を口にした覚えはない。寝言でも言ったのだろうか。息子が初めて喋ったというのに素直に喜べないこの哀れさよ。嗚呼、悲しや。

【蛙】

恒河沙 こうかしゃ No. 8

定価 160 yen

1979年11月20日発行(第1刷)

編集発行:時代錯誤社
(〒176 練馬区練馬4-1-18
小山方)

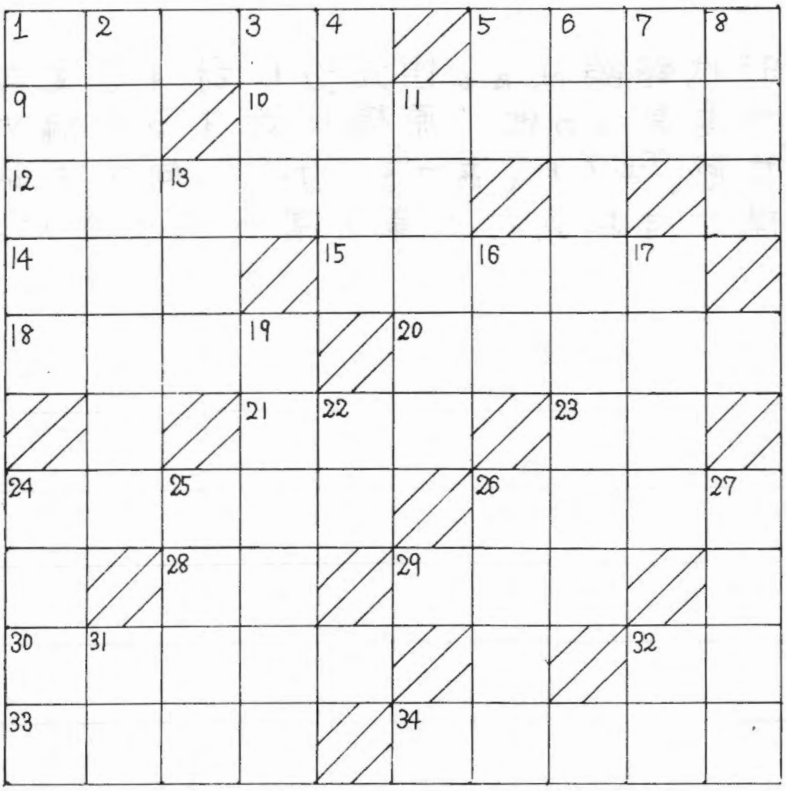
時代錯誤社之印

印刷所:ギンショウ

乱丁落丁はお取り替えします。

ナマモノデスノデオ早目ニオ読ミ下サイ。

クロスワードパズル解答用紙



☆このページを切り取って、封筒に入れて下記までお送り下さい。昼休み販売員に直接手渡してくれても結構です。締切は12月4日です。

アンケートにお答え下さい。(裏もお願いします。)

1. 今号で面白かった記事は？

   1.ドッポに救いはあるか　2.今、再び東大を問う　3.駒場祭企画紹介
   4 Discover Komaba　5 人物クローズアップ　6 コラム時代錯誤家
   7 いちご白書云々　8 ぼくはインテリ　9 増殖システム
   10 みんなに聞いてほしいひとりごと　11.ニヒリズムを考える
   12 モラトリアム人間云々　13.予言について　14 新幹線車内販売体験記
   15 書評　16 クロスワードパズル

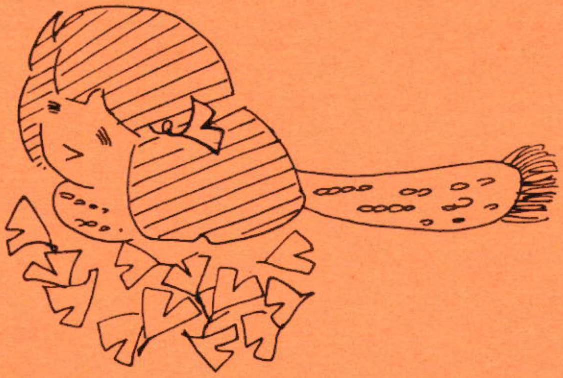
2. 何号をお読みですか　1、2、3、4、5、6、7、
3、恒河沙の値段は高いかいか。　高い、安い、適度
4、恒河沙の内容は？　硬い、軟かい、適度
5、今までで特に面白かった記事は？(　　　　　　)

◎送り先

〒176　練馬区練馬4－1－18　小山方　時代錯誤社

時代錯誤社及び恒河沙に対する文句や意見その他、原稿に対する反論や共感、「おくれ&あげる」etc…、何でも結構ですお気付の事を書いて下さい。

御名前　　　　　　　　御住所



定価 160圓